

発行者情報

【表紙】

【公表書類】

発行者情報

【公表日】

2019年6月28日

【発行者の名称】

コンピュータマインド株式会社
(Computer Mind Co., Ltd.)

【代表者の役職氏名】

代表取締役執行役員社長 竹内 次郎

【本店の所在の場所】

神奈川県川崎市宮前区宮崎二丁目10番9号

【電話番号】

(044)856-9922 (代表)

【事務連絡者氏名】

取締役執行役員 東 時生

【担当J-Adviserの名称】

フィリップ証券株式会社

【担当J-Adviserの代表者の役職氏名】

代表取締役 下山 均

【担当J-Adviserの本店の所在の場所】

東京都中央区日本橋兜町4番2号

【担当J-Adviserの財務状況が公表されるウェブサイトのアドレス】

<https://www.phillip.co.jp/>

【電話番号】

(03)3666-2101

【取引所金融商品市場等に関する事項】

東京証券取引所 TOKYO PRO Market

なお、振替機関の名称及び住所は下記のとおりです。

名称：株式会社証券保管振替機構

住所：東京都中央区日本橋茅場町二丁目1番1号

コンピュータマインド株式会社

<https://www.cmind.co.jp/>

株式会社東京証券取引所

<https://www.jpx.co.jp/>

【公表されるホームページのアドレス】

【投資者に対する注意事項】

- 1 TOKYO PRO Marketは、特定投資家等を対象とした市場であり、その上場会社は、高い投資リスクを含んでいる場合があります。投資者は、TOKYO PRO Marketの上場会社に適用される上場適格性要件及び適時開示基準並びに市場価格の変動に関するリスクに留意し、自らの責任で投資を行う必要があります。また、投資者は、発行者情報により公表された情報を慎重に検討した上で投資判断を行う必要があります。特に、第一部 第3 4【事業等のリスク】において公表された情報を慎重に検討する必要があります。
- 2 発行者情報を公表した発行者のその公表の時における役員（金融商品取引法（以下「法」という。）第21条第1項第1号に規定する役員（取締役、会計参与、監査役若しくは執行役又はこれらに準ずる者）をいう。）は、発行者情報のうちに重要な事項について虚偽の情報があり、又は公表すべき重要な事項若しくは誤解を生じさせないために必要な重要な事実に関する情報が欠けていたときは、法第27条の34において準用する法第22条の規定に基づき、当該有価証券を取得した者に対し、情報が虚偽であり又は欠けていることにより生じた損害を賠償する責任を負います。ただし、当該有価証券を取得した者がその取得の申込みの際に、情報が虚偽であり、又は欠けていることを知っていたときは、この限りではありません。また、当該役員は、情報が虚偽であり又は欠けていることを知らず、かつ、相当な注意を用いたにもかかわらず知ることができなかったことを証明したときは、上記賠償責任を負いません。
- 3 TOKYO PRO Marketにおける取引所規則の枠組みは、基本的な部分において日本の一般的な取引所金融商品市場に適用される取引所規則の枠組みと異なっています。すなわち、TOKYO PRO Marketにおいては、J-Adviserが重要な役割を担います。TOKYO PRO Marketの上場会社は、特定上場有価証券に関する有価証券上場規程の特例（以下「特例」という。）に従って、各上場会社のために行動するJ-Adviserを選任する必要があります。J-Adviserの役割には、上場適格性要件に関する助言及び指導、並びに上場申請手続のマネジメントが含まれます。これらの

点について、投資者は、東京証券取引所のホームページ等に掲げられるTOKYO PRO Marketに係る諸規則に留意する必要があります。

- 4 東京証券取引所は、発行情報の内容（発行情報に虚偽の情報があるか否か、又は公表すべき事項若しくは誤解を生じさせないために必要な重要な事実に関する情報が欠けているか否かという点を含みますが、これらに限られません。）について、何らの表明又は保証等をしておらず、前記賠償責任その他の一切の責任を負いません。

第一部【企業情報】

第1【本国における法制等の概要】

該当事項はありません。

第2【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

連結経営指標等

回次		第40期	第41期	第42期
決算年月		2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高	(千円)	453,144	497,714	443,215
経常利益又は経常損失(△)	(千円)	3,593	2,933	△13,600
親会社株主に帰属する当期純利益又は 親会社株主に帰属する当期純損失(△)	(千円)	746	336	△14,330
包括利益	(千円)	746	△3	△14,231
純資産額	(千円)	148,038	139,333	119,351
総資産額	(千円)	497,534	702,064	622,103
1株当たり純資産額	(円)	328.97	309.62	266.71
1株当たり配当額 (うち1株当たり中間配当額)	(円)	13.00 (-)	10.00 (-)	8.00 (-)
1株当たり当期純利益金額又は 1株当たり当期純損失金額(△)	(円)	1.65	0.74	△31.93
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 金額	(円)	-	-	-
自己資本比率	(%)	29.7	19.8	19.2
自己資本利益率	(%)	-	0.2	△11.1
株価収益率	(倍)	301.4	-	-
配当性向	(%)	787.8	1,336.0	-
営業活動によるキャッシュ・フロー	(千円)	66,789	108,079	△52,716
投資活動によるキャッシュ・フロー	(千円)	△287,785	△71,674	△60,078
財務活動によるキャッシュ・フロー	(千円)	186,740	62,184	△7,179
現金及び現金同等物の期末残高	(千円)	100,892	199,481	79,506
従業員数 (外、平均臨時雇用者数)	(人)	22 (18)	22 (14)	27 (13)

(注) 1. 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 第41期の株価収益率については、取引実績がないため、記載しておりません。また、第42期の株価収益率は、親会社株主に帰属する当期純損失であるため記載しておりません。

4. 当社は第40期より連結財務諸表を作成しているため、第40期の自己資本利益率については記載しておりません。

5. 第42期の配当性向については、親会社株主に帰属する当期純損失を計上しているため記載しておりません。
6. 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数は、期中の平均人員を（ ）外数で記載しております。
7. 特定上場有価証券に関する有価証券上場規程の特例第128条第3項の規定に基づき、第40期（2016年4月1日から2017年3月31日まで）及び第41期（2017年4月1日から2018年3月31日まで）の連結財務諸表についてリンクス有限責任監査法人の監査を受けており、第42期（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の連結財務諸表について監査法人やまぶきの監査を受けております。

2【沿革】

当社は設立以降、単体でシステム開発、運用支援、日本語資源開発事業等のIT関連に関する事業を主体として行ってきましたが、2014年9月から太陽光発電所の設置プロジェクトの管理業務等を行う再生可能エネルギー活用事業を開始し、エネルギー事業に進出しております。また、2016年5月には、太陽光エネルギーによる発電・売電事業を目的としたコンピュータマインドエナジー1株式会社を当社の連結子会社（100%子会社）として設立しました。

なお、当社は連結子会社を含めた企業グループ（以下、連結子会社を含む場合「当社グループ」）を構成しているため、当社グループの沿革についても記載いたします。

当社を含めた当社グループを構成する各社の設立以降にかかる沿革は以下のとおりであります。

年月	事項
1978年 3月	ソフトウェア開発技術者派遣事業を主業務としたコンピュータマインド株式会社を東京都目黒区に資本金3,000千円で設立
1981年 10月	新聞制作システムの開発業務を開始
1982年 5月	資本金4,000千円に増資
1986年 2月	資本金10,000千円に増資 本社を東京都渋谷区に移転
1989年 5月	資本金14,000千円に増資
1989年 6月	資本金20,000千円に増資
1994年 10月	本社を神奈川県川崎市宮前区宮崎に移転
1999年 6月	トータル新聞編集システムテクニカルサポート業務を開始
2005年 7月	日本証券業協会よりグリーンシート銘柄としての指定を受け、株式を公開
2005年 9月	資本金30,590千円に増資
2006年 4月	沖縄県那覇市に沖縄ランチオフィスを開設し、トータル新聞編集システムテクニカルサポートセンターを本社から沖縄へ移設
2007年 3月	日本語資源管理業務を開始
2008年 2月	東京都杉並区に荻窪サテライトオフィス開発センターを開設
2009年 10月	【情報セキュリティ 27001:2005 / JIS Q 27001:2006】取得 認証登録番号 IS 552522
2011年 2月	【プライバシーマーク / JIS Q 15001:2006準拠】取得 登録番号 10823775
2012年 8月	開発業務拡大のため荻窪サテライトオフィスを東京都杉並区に移転
2012年 10月	【ITサービス 20000:2005 / JIS Q 20000:2007】沖縄ランチオフィスにて取得 認証登録番号 ITMS 586208
2013年 10月	沖縄ランチオフィスにおいて第三者検証事業を開始
2014年 9月	再生可能エネルギー活用事業を開始
2015年 2月	【個人情報保護 JIS Q 15001:2006】取得 登録番号 PIMS 629903
2015年 6月	グリーンシート銘柄としての指定を取消し
2015年 7月	業務拡大のため沖縄ランチオフィスを沖縄県那覇市に移転
2015年 8月	資本金32,180千円に増資
2015年 9月	資本金35,000千円に増資
2016年 5月	沖縄県那覇市に太陽光エネルギーによる発電・売電事業を目的にコンピュータマインドエナジー1株式会社(100%出資)を設立
2016年 6月	東京証券取引所 TOKYO PRO Market に上場
2017年 2月	コンピュータマインドエナジー1株式会社のかつらぎソーラーパーク（932kW、和歌山県伊都郡かつらぎ町）の第一期工事が完成し、発電・売電が稼働
2017年 9月	コンピュータマインドエナジー1株式会社のかつらぎソーラーパーク（356kW、和歌山県伊都郡かつらぎ町）の第二期工事が完成し、発電・売電が稼働
2018年 8月	東京都港区に芝大門サテライトオフィス開設

3【事業の内容】

当社グループは、当社（コンピュータマインド株式会社）及び連結子会社1社（コンピュータマインドエナジー1株式会社）により構成されております。

当社は、本社がある神奈川県川崎市を中心に、沖縄ブランチオフィス（沖縄県那覇市）、荻窪サテライトオフィス（東京都杉並区）、芝大門サテライトオフィス（東京都港区）にて、IT関連事業及び再生可能エネルギー活用事業を行っております。また、連結子会社であるコンピュータマインドエナジー1株式会社では、太陽光発電・売電事業を行っており、セグメントに関しては、再生可能エネルギー活用事業に区分しております。

なお、当社グループにおける位置付け及び、事業内容との関連は以下のとおりであります。

区分	会社名	報告セグメント
—	コンピュータマインド株式会社	IT関連事業 ／再生可能エネルギー活用事業
連結子会社	コンピュータマインドエナジー1株式会社	再生可能エネルギー活用事業

(1) IT関連事業

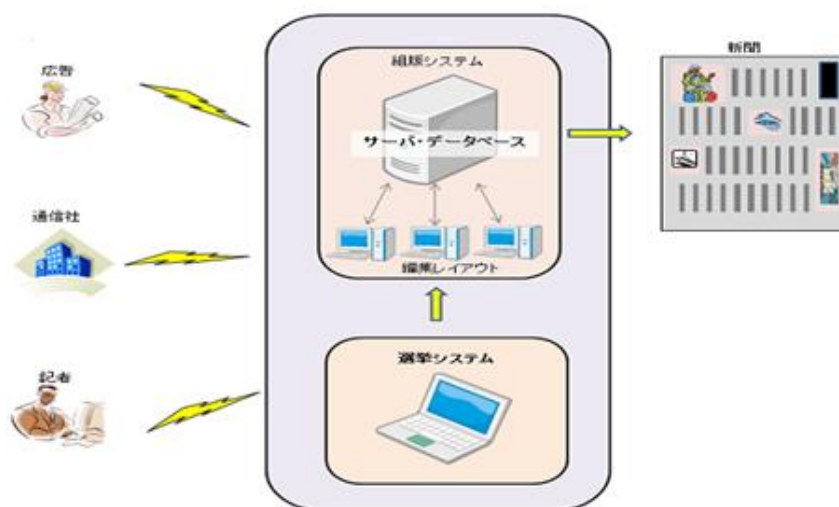
①システム開発事業

当事業におきましては、新聞編集システム及び、その他のシステム開発を行っております。

新聞編集システムにつきましては、通信社や記者から入稿した記事原稿をサーバーで管理し、それを新聞紙面の形で割付けることを可能とする「トータル新聞編集システム」の開発に携わっております。当該システムでは、選挙システム、囲碁将棋システム及び画像システム等を適宜活用することにより、新聞紙面にふさわしい記事の形式をコンピュータにて制作可能としております。なお、当該システムは、県紙規模から全国紙までの新聞社を対象としており、運用システムを担当するハードウェアメーカーと共同で取り組んでおります。

その他のシステム開発につきましては、航空衛星写真画像分析システム、日本語文字に関する開発、Mobile 端末向けアプリケーション等の開発などを行っております。

〈トータル新聞編集システムのイメージ図〉



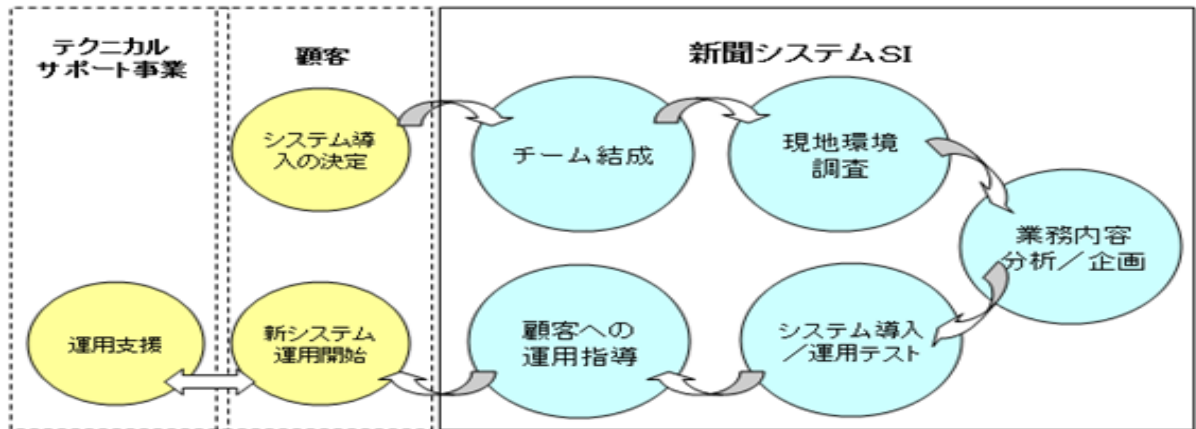
②運用支援事業

当事業におきましては、a. システムインテグレーション業務（以下「新聞S I 業務」）、b. テクニカルサポート業務を行っております。

a. 新聞S I 業務

新聞S I 業務につきましては、当社グループが開発に携わっている「トータル新聞編集システム」を導入する際に、エンドユーザーである各新聞社の制作工程、制作媒体種類、各制作媒体データ量、文字デザイン、日本語同定、固定出力フォーマットの確認、他メーカーの接続インターフェースの確認、機能要件、非機能要件などを事前に調査し、各新聞社にとって最適なシステムの提案を行います。システム導入後、運用テストの実施、各新聞社へシステムの説明、運用指導を一貫して行うサービスです。

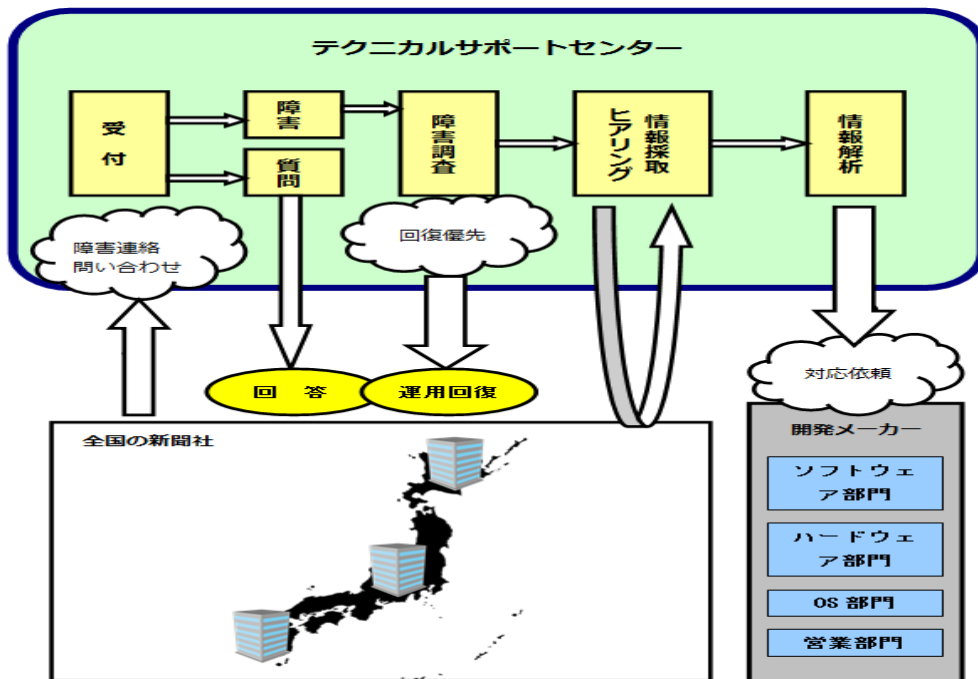
〈新聞S I業務のフロー図〉



b. テクニカルサポート業務

テクニカルサポート業務につきましては、「トータル新聞編集システム」を導入した新聞社のシステム障害に迅速に対応する専門のテクニカルサポートセンターを設置し、当該顧客のサポートを行っております。新聞には公共性及び速報性があり、新聞発行の遅延、中止及び停止は社会性の観点から許容されません。そのため、「トータル新聞編集システム」の障害に対してはでき得る限り迅速に対応する必要があります。そのような観点から当業務では、各新聞社の業務時間に対応するため、9時から翌2時まで2交代制でテクニカルサポートセンター（沖縄ブランチオフィス）を稼働させております。

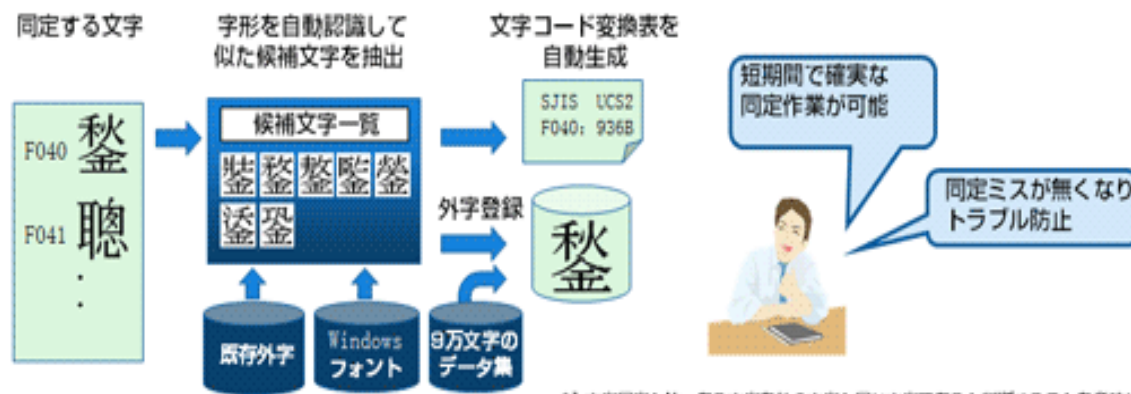
〈テクニカルサポート業務のイメージ図〉



③日本語資源開発事業

当事業におきましては、文部科学省及び文化庁による常用漢字及び常用漢字以外の漢字（表外字）の文字コード変更に対応するため、日本語文字に関する「文字同定」「辞書データ」など日本語文字に関する開発をハードウェアメーカーから受託し行っております。

〈日本語資源開発事業のイメージ図〉



*1 文字同定とは、ある文字を他の文字と同じ文字であると判断することを意味します。

④その他事業

その他事業におきましては、一般消費者を対象としたパソコン教室業務を行っております。このパソコン教室業務は(株)富士通ラーニングメディアとの提携により、富士通オープンカレッジ荻窪校の名称を用いて運営しております。

(2) 再生可能エネルギー活用事業

①太陽光発電所で使用する機材の仕入及び販売

当事業におきましては、事業者等より、太陽光発電所の設置プロジェクトの管理業務を提携会社と共同で受託し（共同プロジェクト管理者）、取り組んでおります。その中で、当社グループが担う主な業務としましては太陽光発電パネルなどの機材仕入れを担当し、提携会社では、太陽光発電の設置工事などを担当する事で、それぞれの業務を分担しております。また、当社グループでは、太陽光発電所の設置に際して使用する発電量コントロールシステム及びシステム異常時の自動復旧処理システムの企画・設計なども行っております。

②防災関連商品販売事業

防災関連商品販売事業は、災害時にも通話しやすく、携帯電話やテレビよりも正確に緊急地震速報などの災害情報を受信することが可能な緊急災害情報付き無線機（ハザードトーク）の販売、専用の子機を持つことにより海等で遭難した際にも親機を使って広範囲の検索が可能な海難遭難者検索ツール（サーチミー）の販売等を行っております。皆さまの安全・安心をサポートするためにお役に立つ商品を販売することが目的で行っております。

<緊急災害情報付き無線機の機能概要>

ケータイ・スマホでは広範囲速報としてアラート音しか流れませんが、DEWS（デュース）ではハザードトーク端末地点のピンポイントで正確な揺れの大きさや、猶予時間を『アラート音』『音声ガイダンス読上』『文字』で端末から放送が入ります。

デュース DEWS 情報収集・安全配慮にも対応!
～東日本大震災以降、企業・団体に課せられています～

- ★高度緊急地震速報
- ★津波警報
- ミサイル発射テロ情報・気象警報
- 土砂災害・河川洪水予報・警報

※設置地区が対象となっております。日ごころからの防災意識向上にも役立ちます。 ※画面イメージです。

1秒でも早く揺れを知り、行動をとるだけで死傷率が変わる!

大きな揺れが来るまでの猶予時間	緊急地震速報導入後の死傷率減率	死傷者が多い
2秒	25%軽減	
5秒	80%軽減	
10秒	90%軽減	
20秒	95%軽減	死傷者が少ない

※緊急地震速報導入による社会へのインパクト (国土庁 平成24年度防災関係行政調査レポート)参照

◎災害時でもつながりやすいデータ帯域で通話!

	HAZARD TALK 使用帯域	一般的なケータイ (一般利用)	HAZARD TALK の場合 (高度利用型)	警告震度	警告エリア	通知方法
パケット帯域 I. 災害時に規制されづらい (東日本大震災では一部制限有) 音声帯域 II. 災害時の発信規制対象 (東日本大震災では80%制限された) III. 発信規制に実装に利用できる音声通話の帯域	HAZARD TALK 使用帯域	一般的なケータイ (一般利用)	HAZARD TALK の場合 (高度利用型)	震度5弱以上	震度4以上の地震が予想される大まかな地域	×アラームと文字詳細情報なし
	HAZARD TALK 使用帯域	一般的なケータイ (一般利用)	HAZARD TALK の場合 (高度利用型)	震度3から自由設定 訓練配信可	端末のある正確な場所 (経度・緯度・地盤増幅率を演算)	○音声と文字詳細な震度と猶予時間をアナウンス

HAZARD TALK はなぜいち早く地震速報を受信するのか

一般的なケータイ (一般利用) → 2カ所以上の地震計でP波を感知するとアラートを発信

HAZARD TALK の場合 (高度利用型) → 1カ所でも地震計でP波を感知するとアラートを発信

<海難遭難者検索ツールの機能概要>

電波飛距離範囲外
親機に「近くにいません」と表示されます。

電波飛距離範囲内
親機の電波を受け取った子機が電波を返し、その電波を受け取った親機が電波の方角・距離を表示します。

例) レジャーボートから落水した場合

薄暗い → SearchMeを持っていない → 漂流事故につながる危険性が高まる

波が高い等の悪条件 → SearchMeを持っている → 早期発見の可能性が高まる

親機にサーチしたい子機のIDを入力し検索を開始すると親機が電波を發します。海上での電波飛距離は直接で約1Km 中継器リピーターを使えば約2Km 空からの検索で約5Km となります。

目標での捜索が難しいため

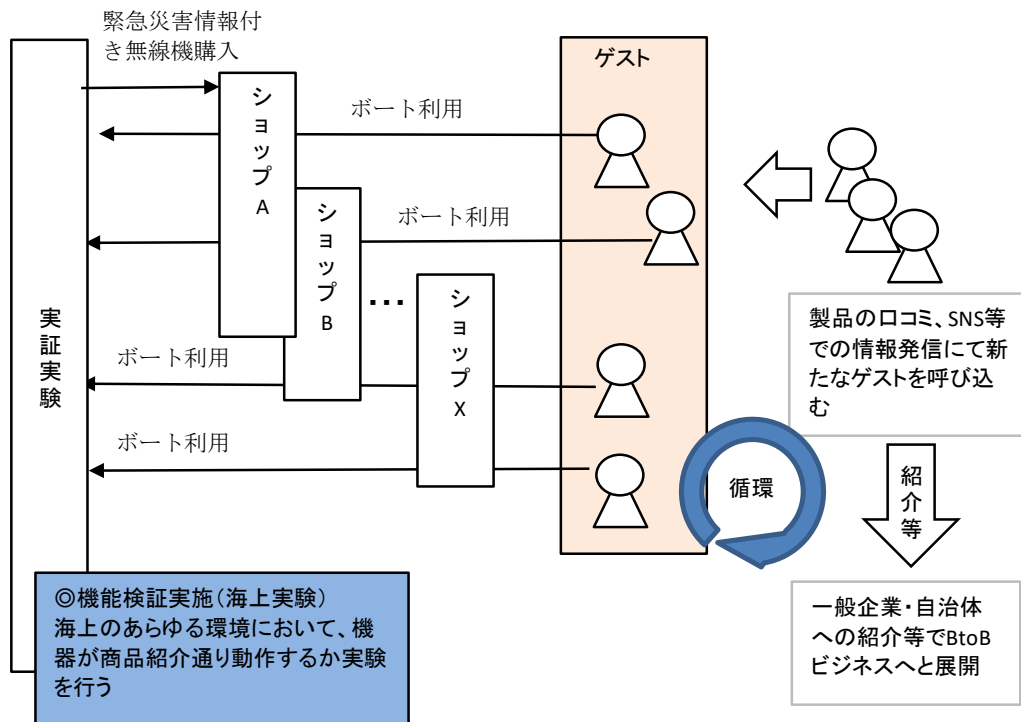
電波を船に届けるため

③実証実験事業

当社グループが取り扱う防災関連商品である「海難遭難者検索ツール」と「緊急災害情報付き無線機」の実証実験を目的としたプロジェクトです。

〈実証実験事業概要〉

実証実験概要図



〈当社グループ〉

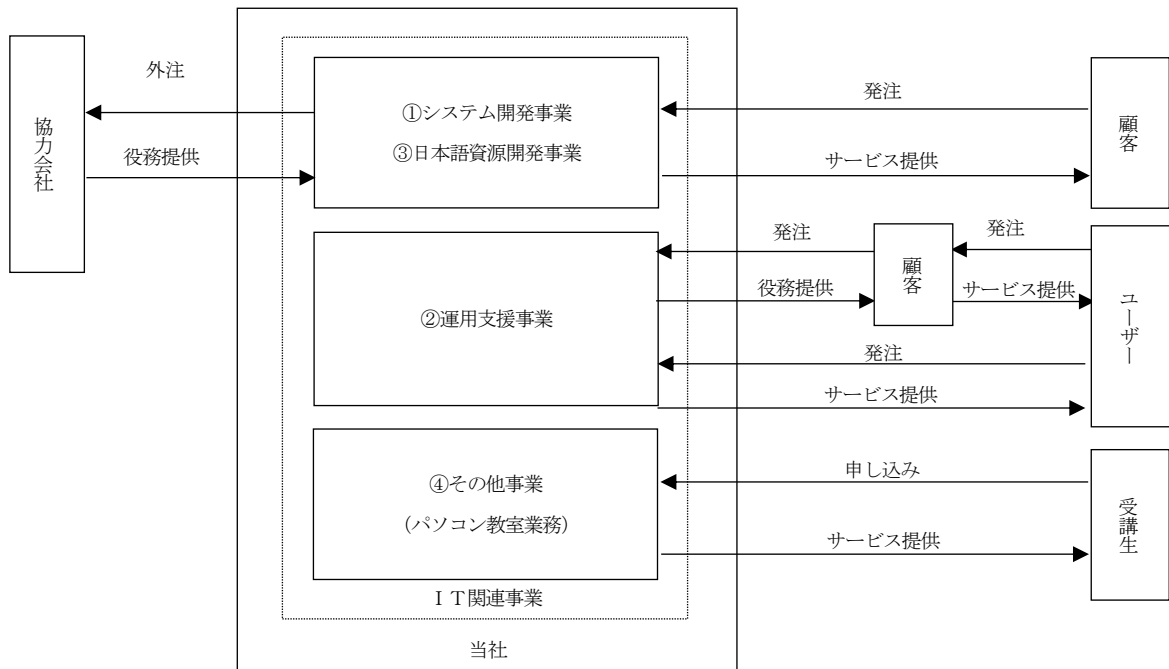
連結子会社の事業内容は以下のとおりであります。

コンピュータマインドエナジー1株式会社

当社グループであるコンピュータマインドエナジー1株式会社は太陽光エネルギーによる発電・売電事業を行っております。当連結会計年度末現在において、和歌山県伊都郡かつらぎ町に「かつらぎソーラーパーク（932kW）」の第一期工事が完成し、2017年2月3日から発電・売電の稼働を開始しております。また、「かつらぎソーラーパーク（356kW）」の第二期工事も完成し、2017年9月19日から発電・売電の稼働を開始しております。

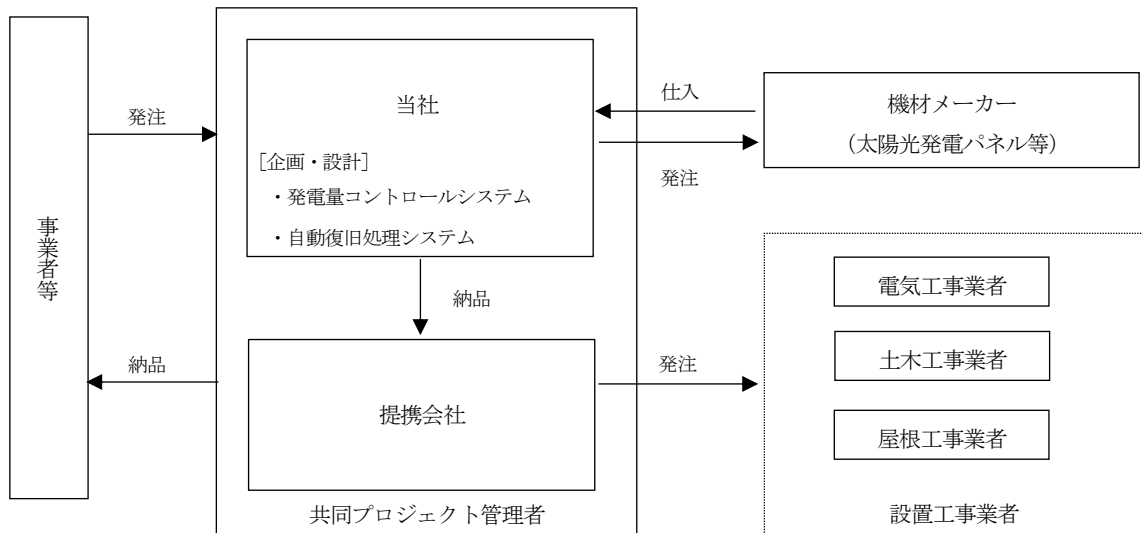
[事業系統図]

(1) IT関連事業

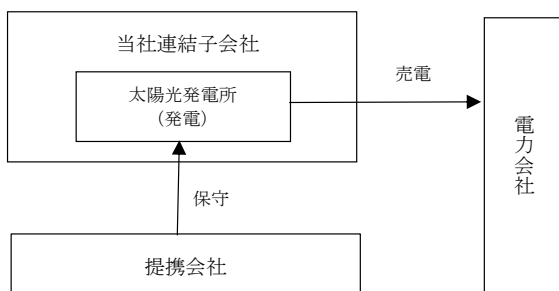


(2) 再生可能エネルギー活用事業 (太陽光発電所)

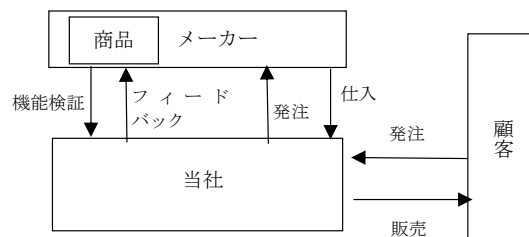
①太陽光発電所の設置プロジェクト



②発電・売電事業



③防災関連商品販売・実証実験



4【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (千円)	主要な事業の内容	議決権の所有割合 又は被所有割合 (%)	関係内容
(連結子会社) コンピュータマインド エナジー1株式会社	沖縄県 那覇市	10	再生可能エネルギー 活用事業	100.0	役務の提供 資金の立替 役員の兼任

(注) 1. 主要な事業の内容には、セグメントの名称を記載しております。

2. 有価証券届出書または有価証券報告書を提出している会社はありません。

5【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2019年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数 (人)
I T 関連事業	24 (11)
再生可能エネルギー活用事業	1 (1)
全社 (共通)	2 (1)
合計	27 (13)

(注) 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数は、当連結会計年度の平均雇用人員を () 外数で記載しております。

(2) 提出会社の状況

2019年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
27 (13)	41.4	11.4	4,910

セグメントの名称	従業員数 (人)
I T 関連事業	24 (11)
再生可能エネルギー活用事業	1 (1)
全社 (共通)	2 (1)
合計	27 (13)

(注) 1. 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数は、年間の平均雇用人員を () 外数で記載しております。

2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

(3) 労働組合の状況

当社グループにおいて労働組合は結成されておきませんが、労使関係は円満に推移しております。

第3【事業の状況】

1【業績等の概要】

(1) 業績

当連結会計年度における我が国経済は、政府による各種政策を背景として雇用・所得環境に改善が見られ緩やかな回復基調が続いております。一方、海外経済におきましては、米国の保護主義的な通商政策の長期化、中国経済の減速の影響、地政学的リスクへの懸念などがあり、先行きの不透明感が払拭されない状況にあります。

このような状況の中、当社グループの属する情報サービス産業においては、「第4次産業革命」と呼ばれるI o Tやビッグデータ、A I等の先進的なI T技術の活用による産業構造変革がグローバル規模で進展してきている状況となっております。

これらの結果、当連結会計年度における業績につきましては、売上高 443,215 千円(前年同期比 10.9%減)、営業損失 8,528 千円(前年同期は営業利益 7,676 千円)、経常損失 13,600 千円(前年同期は経常利益 2,933 千円)、親会社株主に帰属する当期純損失 14,330 千円(前年同期は親会社株主に帰属する当期純利益 336 千円)となりました。

[セグメントの業績の概要]

① I T関連事業

I T関連事業につきましては、当社の強みである新聞関連業務を中心に順調に業務受注するとともに、当連結会計年度は事業譲受を行うことで、売上を大きく伸ばしました。その結果、売上高 339,968 千円(前年同期比 20.7%増)、セグメント利益は 72,859 千円(前年同期比 26.1%増)となりました。

② 再生可能エネルギー活用事業

再生可能エネルギー活用事業につきましては、売上が計画より下回りました。また、自然災害の復旧費用や新たな設備投資等を行ったことで経費が増加し、その結果、売上高 103,247 千円(前年同期比 52.2%減)、セグメント損失は 14,008 千円(前年同期はセグメント利益 7,617 千円)となりました。

(2) キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における現金及び現金同等物(以下「資金」という。)の残高は、前連結会計年度末に比べ 119,974 千円減少し、79,506 千円となりました。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動によるキャッシュ・フローは、減価償却費 37,410 千円等の資金増加要因があったものの、仕入債務の減少額 63,100 千円、売上債権の増加額 29,577 千円等の資金減少要因により、52,716 千円の資金減少(前期は、108,079 千円の増加)となりました。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動によるキャッシュ・フローは、事業譲受による支出 22,416 千円、有形固定資産の取得による支出 13,988 千円等の資金減少要因により、60,078 千円の資金減少(前期は、71,674 千円の減少)となりました。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動によるキャッシュ・フローは、長期借入金による収入 60,000 千円の資金増加要因があったものの、長期借入金の返済による支出 61,429 千円、配当金の支払額 4,500 千円等の資金減少要因により、7,179 千円の資金減少(前期は、62,184 千円の増加)となりました。

2【生産、受注及び販売の状況】

(1) 生産実績

該当事項はありません。

(2) 受注状況

当連結会計年度における受注実績をセグメントごとに示すと、次のとおりとなります。

セグメントの名称	受注高		受注残高	
	金額 (千円)	前年同期比 (%)	金額 (千円)	前年同期比 (%)
I T 関連事業	326,927	121.2	—	—
再生可能エネルギー活用事業	67,724	37.2	—	—
合計	394,652	87.6	—	—

(注) 上記金額には消費税等は含まれておりません。

(3) 販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりとなります。

セグメントの名称	販売高 (千円)	前年同期比 (%)
I T 関連事業	339,968	120.7
再生可能エネルギー活用事業	103,247	47.8
合計	443,215	89.1

(注) 1. 上記金額には消費税等は含まれておりません。

2. I T 関連事業には、受注の形態のとらない事業（その他事業）が含まれております。

3. 前連結会計年度及び当連結会計年度の主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は次のとおりであります。

相手先	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)		当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)	
	金額 (千円)	割合 (%)	金額 (千円)	割合 (%)
NEC ソリューションイノベータ(株)	151,448	30.4	143,970	32.5
日本電気(株)	58,919	11.8	111,843	25.2
(株)E-Light	182,032	36.6	61,307	13.8

3. 上記金額には消費税等は含まれておりません。

3【対処すべき課題】

当社グループの主要事業が属する情報サービス産業につきましては、企業のIT関連投資の潜在的なニーズはあるものの、経済環境の影響により、当該ニーズが顕在化しない状況が続いております。また、情報サービス業界には、大小を問わず多くの企業が参入しており、その競争環境は従来にも増して厳しい状況が続くものと予想されます。

このような環境のもと、顧客企業は品質やサービスにおいても高い水準を求める傾向があり、当社グループはそのような顧客企業のニーズを最大限満たせるよう、更なる経営管理体制の強化を図ってまいります。

また、今後の業容拡大を実現させるため、当社グループは優秀な人材の積極的な採用や教育研修制度を充実させるとともに、従業員のモチベーションを高める仕組み作りにも鋭意取り組んでまいります。また、企業規模が拡大する過程において、コーポレート・ガバナンスの充実及び強化も図り、透明性の高い経営を実践していく所存であります。

当社グループは今後も安定成長を目指すために、次の事項を対処すべき課題と認識し、迅速に対処してまいります。

(1) 優秀な人材の確保

当社グループの業容を拡大するためには、優秀な人材の確保が必要であります。しかしながら、労働人口が減少する環境下において、首都圏では新卒採用及び即戦力である中途採用にて人材を雇用することが難しくなっております。また、協力会社から技術者を確保することも、より一層困難となっております。

このような状況のもと、当社グループでは採用活動をより一層強化するとともに、自社の知名度を高めるための施策も積極的に採用していく方針であります。

(2) 顧客満足度の更なる向上

当社グループの展開する各事業において、主要顧客とは長年取引を継続しております。つきましては、これら主要顧客と良好な関係のもと、取引を継続若しくは拡大していくためには、顧客満足度の更なる向上が必須となります。そのため、業務において品質を維持するだけでなく、顧客との対面でのコミュニケーションを重視し、機動力をもち小回りの利くサービスを提供していく方針であります。

(3) 収益力の増強

当社グループが展開する各事業においては、技術者一人あたりの売上高及び利益額が業容拡大の要となります。現在の主力事業であるIT関連事業におけるシステム開発事業及び、運用支援事業では、人材確保が厳しい状況にあるため、成長性に制限のある状態が続いております。そこで、長年に渡り培った当社グループ内における知識、技術及びノウハウ等を活用し、技術者のスキルを高めることで、一人あたりの売上高及び利益額を継続的に伸ばしていけるよう取り組んでいます。

(4) 安定的な収益基盤の確立

当社グループの主力事業の一つであるIT関連事業におけるシステム開発事業は、企業のIT投資計画の需要に影響を受ける傾向があり、企業のIT投資計画は一般的に景気動向の影響を受けるとされております。そのため、当社グループでは顧客のIT投資計画を共有することにより、より安定的な受注の確保を行い、景気動向の影響を受けづらい収益基盤の構築を図ってまいります。

また、当社グループのIT関連事業における運用支援事業は、比較的景気の変動を受けにくい傾向があるため、今後も安定的な拡大を実現できるよう取り組んでいます。

(5) 内部管理体制の強化について

当社グループは、比較的小規模な組織であるため、継続的な成長を実現できる企業体質を確立する必要があります。そのため、リスク管理や業務運営管理をはじめとする内部管理体制の強化が重要な課題であると認識しております。今後の企業規模拡大に備え、内部管理体制の整備と適切な運用を推進し、経営の公正性及び透明性を確保するため、体制強化に取り組んでいます。

4【事業等のリスク】

以下において、当社グループの事業展開その他に関してリスク要因と考えられる主な事項を記載しております。

当社グループは、これらのリスク発生の可能性を認識した上で、発生の回避及び発生した場合の適切な対応に努める方針ですが、当社グループ株式に関する投資判断は、以下の事項及び本項以外の記載事項を慎重に検討した上で行われる必要があると考えております。

また、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末日現在において当社グループが判断したものであり、実際の結果とは異なる可能性があります。

(1) 市場環境に関するリスクについて

①事業環境について

当社グループの主要事業が属する情報サービス産業においては、競合他社との競争激化により、低価格化の傾向が続いております。このような環境の下、経済情勢の変化等により顧客企業のIT投資動向が急速に変化した場合や情報サービス産業内の価格競争が現状の水準を大きく超えて継続した場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

②競合他社の参入障壁について

当社グループの各事業には、現状参入障壁といえるものは存在していません。なお、新聞編集システムの開発や運用支援及び日本語文字に関する「文字同定」「辞書データ」などの開発については、市場規模は小さく、参入している企業も少ないため、競合他社が当該分野への進出を図るには知識及びノウハウの習得や人員の確保等により、相応の時間がかかるものと思われます。しかしながら、今後、優良な競合他社が当社グループの主要な事業領域へ多数参入し、既存の顧客基盤の維持や新規の顧客獲得が困難な状況に陥った場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

③技術革新への対応について

当社グループの主要事業が属する情報サービス産業においては技術革新が急速に発達するため、当社グループが現状有する技術、技能及びノウハウ等の優位性が損なわれる可能性があります。また、当社グループの提供するサービス等が、情報サービス産業の技術標準の変化により、その競争優位性若しくは価格優位性を失うこともありえます。したがって、当社グループは技術革新に適宜対応するため、従業員の能力を高め、新しい技術の組織的発掘及び習得を推進しておりますが、当社グループが技術変化の方向性を正しく予測及び認識できない場合、また予測し得ても適切に対応できない場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

④システムの開発について

当社グループは、顧客の要望事項に基づきシステムの開発及び運用支援等を行っており、これらの品質管理には徹底を期し、顧客サービスの満足度の向上に努めておりますが、当社グループが提供するサービス等において、品質上のトラブルが発生しないという保証はなく、このような品質上の不具合が生じた場合には、不具合に対応する追加コストの発生や損害賠償等により、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

⑤新聞社の動向について

当社グループの主事業であるIT関連事業におけるシステム開発事業及び、運用支援事業等の受注先は、大手電気メーカーですが、実際にシステムを導入する先は新聞社となります。新聞各社は、リーマンショック以降、広告収入の減少などの影響もあり、複数社共有システムや、クラウドを使った新聞編集システムなど低コストなシステムを導入する新聞社も増えつつあります。また、地方新聞社においては廃刊するリスクも潜在的にあり、これらの市場環境によっては、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(2) 当社グループ事業に関するリスクについて

①機密情報の管理について

当社グループは、顧客企業情報及び個人情報を取り扱っており、当該機密情報を適切に管理し、安全性を確保することが企業の責務であると深く認識しております。

当社グループでは、「情報セキュリティマネジメントシステム JIS Q 27001」及び、「個人情報保護 JIS Q 15001」を取得しており、コンピュータ・ウィルス対策及びネットワーク管理等による情報の保護、入退館者の確認、情報管理に関する社内教育の徹底及び外部協力業者との機密保持契約の締結等を行い、当社グループからの情報漏洩を未然に防ぐ対策を講じております。

このような対策を講じているにもかかわらず、当社グループが情報漏洩に関与した場合には、損害賠償請求の可能性があるほか、各種業務の継続にも支障が生じる場合があり、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

②特定の取引先への依存について

当社グループは、第42期（自2018年4月1日至2019年3月31日）において、NECソリューションイノベータ㈱、日本電気㈱、㈱E-lightを主要販売先としております。なお、同期におけるNECソリューションイノベータ㈱への売上高は143,970千円であり、売上高全体に占める割合は32.5%、日本電気㈱への売上高は111,843千円であり、売上高全体に占める割合は25.2%、㈱E-lightへの売上高は61,307千円であり、売上高全体に占める割合は13.8%となっております。そのため、前記各社の経営状況や設備計画等が、当社グループの業績に影響を与える可能性があります。

③特定の経営者への依存について

当社グループの会社経営及び事業展開は、当社の代表取締役社長竹内次郎の経営能力、人的ネットワークに依存しております。今後、同氏に依存しない組織を構築する計画でありますが、何らかの要因により同氏による当社グループの業務遂行が困難となった場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

なお、発行者情報提出日現在において、代表取締役社長竹内次郎は当社の発行済株式総数（自己株式2,500株除く）の64.7%を所有する筆頭株主であります。

④組織体制について

当社グループは、発行者情報公表日現在において、取締役4名、監査役1名、従業員40名と比較的小規模な組織であり、内部管理体制等も当社グループの規模に応じた組織となっております。そのため、各種業務の中には、特定の人員に依存しているものもあります。今後、事業規模の拡大に応じ然るべき人材採用を行い、業務の平準化や権限の委譲等の内部管理体制強化を図りますが、当該体制の整備に著しく時間を要する場合には、当社グループの事業運営に影響を及ぼす可能性があります。

⑤人材の確保及び育成について

当社グループの主力事業であるシステム開発事業及び運用支援事業に従事する人材には、情報処理技術者の能力や資質が求められます。今後、当社グループが業容を安定的に拡大させていくためには、優秀な人材や適性のある人材を適時確保する必要があります。また、採用した従業員についても、継続的に教育を行い、その育成に努めることは必須となります。

そのため、計画どおり人材の確保及び従業員の育成が行えない場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

⑥プロジェクト管理について

当社グループのシステム開発事業においては、顧客からシステム開発を受託する際、事前にサービスの対価及び納期を定めた請負契約を締結する場合があります。当該契約を締結したプロジェクトについては、原則として契約時に受注金額が確定し、双方が合意した納期までにシステムを開発して納品する責任が当社グループに発生いたします。

当社グループは、システム開発プロジェクトを受託するにあたり、発生が見込まれるコストを積み上げ、それに適正な利潤を乗せたものを見積もり金額として提示しております。また、プロジェクトの受注後は、進捗状況を管理するプ

プロジェクトの責任者を選任し、社内関係者及び顧客に対して定期的に進捗状況を報告することとしております。

しかしながら、すべてのプロジェクトにおいて適正なコストを正確に見積ることは困難であり、仕様変更や追加作業に起因する作業工数の増大等が発生する可能性があります。また、当社グループが開発したシステムにおいて、予期せぬバグの発生やサービス不良等の品質上の問題により、追加コストの発生や損害賠償が発生する可能性があります。このような事態が生じた場合、当社グループの事業活動及び業績に影響を与える可能性があります。

(3) その他のリスクについて

①情報システムトラブルについて

当社グループは、社内のコンピュータシステムに関して、バックアップ体制を確立することによる災害対策を講じておりますが、地震や火災などの災害、コンピュータ・ウィルス、電力供給の停止、通信障害、通信事業者に起因するサービスの長期にわたる中断や停止、現段階では予測不可能な事由によるシステムトラブルが生じた場合、当社グループの事業活動及び業績に影響を与える可能性があります。

②知的財産権に関するリスクについて

近年、当社グループの属する情報サービス産業においては、自社保有技術の特許申請が増加する傾向にあります。そのような環境下において、当社グループの注意が至らず、意図せず他社の知的財産権を侵害してしまう可能性を完全に排除することはできません。そのような場合、訴訟その他の請求の可能性があります。これら訴訟等の内容及び結果によっては、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

③訴訟等の発生可能性について

会社設立より発行者情報公表日現在に至るまで、当社グループに関連する訴訟は一切生じておりません。また、当社グループでは法令遵守を確保するための体制の整備に注力するとともに、弁護士等の専門家との連携を図りながら、訴訟リスクの極小化に努めております。しかしながら、今後当社グループが事業を展開する上で、第三者の権利侵害等に起因する訴訟その他の請求の可能性があります。これら訴訟等の内容及び結果によっては、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(4) J-Adviser との契約について

当社は、(株)東京証券取引所が運営を行っております証券市場 TOKYO PRO Market に上場しております。

当社ではフィリップ証券(株)を2015年3月30日の取締役会において、担当 J-Adviser に指定する事を決議し、2015年3月31日にフィリップ証券(株)との間で、担当 J-Adviser 契約書(以下「当該契約」という。)を締結しております。当該契約は、TOKYO PRO Market における当社株式の新規上場及び上場維持の前提となる契約であり、当該契約を解除し、かつ、他の担当 J-Adviser を確保できない場合、当社株式は TOKYO PRO Market から上場廃止となります。当該契約における契約解除に関する条項及び契約解除に係る事前催告に関する事項は以下のとおりです。

なお、本発行者情報の公表日現在において、当該契約の解除条項に該当する事象は生じておりません。

<J-Adviser 契約解除に関する条項>

当社(以下「甲」という。)が次のいずれかに該当する場合には、フィリップ証券(株)(以下「乙」という。)は J-Adviser 契約(以下「本契約」という。)を即日無催告解除することができる。

① 債務超過

甲がその事業年度の末日に債務超過の状態である場合において、1年以内に債務超過の状態から脱却しえなかったとき、すなわち債務超過の状態となった事業年度の末日の翌日から起算して1年を経過する日(当該1年を経過する日が甲の事業年度の末日に当たらないときは、当該1年を経過する日の後最初に到来する事業年度の末日)までの期間(以下この項において「猶予期間」という。)において債務超過の状態から脱却しえなかった場合。但し、甲が法律の規定に基づく再生手続若しくは更生手続又は私的整理に関するガイドライン研究会による「私的整理に関するガイドライン」に基づく整理を行うことにより、当該1年を経過した日から起算して1年以内に債務超過の状態から脱却することを計画している場合(乙が適当と認める場合に限る。)には、2年以内(審査対象事業年度の末日の翌日から起算して2年を経過する日(猶予期間の最終日の翌日から起算して1年を経過する日が甲の事業年度の末日に当たらないときは、当該1年を経過する日後最初に到来する事業年度の末日)までの期間内)に債務超過の状態から脱却しえなかったとき。

なお、乙が適当と認める場合に適合するかどうかの審査は、猶予期間の最終日の属する連結会計年度(甲が連結財務諸表を作成すべき会社でない場合には事業年度)に係る決算の内容を開示するまでの間において、再建計画(本号但し書に定める1年以内に債務超過の状態でなくなるための計画を含む。)を公表している甲を対象とし、甲が提出する当該再建計画並びに次のa及びbに定める書類に基づき行う。

a 次の(a)又は(b)の場合の区分に従い、当該(a)又は(b)に規定する書面

(a) 法律の規定に基づく再生手続又は更生手続を行う場合

当該再建計画が、再生計画又は更生計画として裁判所の認可を得ているものであることを証する書面

(b) 私的整理に関するガイドライン研究会による「私的整理に関するガイドライン」に基づく整理を行う場合

当該再建計画が、当該ガイドラインにしたがって成立したものであることについて債権者が記載した書面

b 本号但し書に定める1年以内に債務超過の状態でなくなるための計画の前提となった重要な事項等が、公認会計士等により検討されたものであることについて当該公認会計士等が記載した書面

② 銀行取引の停止

甲が発行した手形等が不渡りとなり銀行取引が停止された場合又は停止されることが確実となった旨の報告を書面で受けた場合

③ 破産手続、再生手続又は更生手続

甲が法律の規定に基づく会社の破産手続、再生手続若しくは更生手続を必要とするに至った場合(甲が、法律に規定する破産手続、再生手続又は更生手続の原因があることにより、破産手続、再生手続又は更生手続を必要と判断した場合)又はこれに準ずる状態になった場合。なお、これに準ずる状態になった場合とは、次のaからcまでに掲げる場合その他甲が法律の規定に基づく会社の破産手続、再生手続又は更生手続を必要とするに至った場合に準ずる状態になったと乙が認めた場合をいうものとし、当該aからcまでに掲げる場合には当該aからcまでに定める日に本号前段に該当するものとして取り扱う。

a 甲が債務超過又は支払不能に陥り又は陥るおそれがあるときなどで再建を目的としない法律に基づかない整理を行う場合

甲から当該整理を行うことについての書面による報告を受けた日

b 甲が、債務超過又は支払不能に陥り又は陥るおそれがあることなどにより事業活動の継続について困難である旨又は断念する旨を取締役会等において決議又は決定した場合であって、事業の全部若しくは大部分の譲渡又は解散について株主総会又は普通出資者総会に付議することの取締役会の決議を行った場合、甲から当該事業の譲渡又は解散に関する取締役会の決議についての書面による報告を受けた日(事業の大部分の譲渡の場合には、当該事業の譲渡が事業の大部分の譲渡であると乙が認めた日)

c 甲が、財政状態の改善のために、債権者による債務の免除又は第三者による債務の引受若しくは弁済に関する合意を当該債権者又は第三者と行った場合(当該債務の免除の額又は債務の引受若しくは弁済の額が直前事業年度の末日における債務の総額の100分の10に相当する額以上である場合に限る。)

甲から当該合意を行ったことについての書面による報告を受けた日

④ 前号に該当することとなった場合においても、以下に定める再建計画の開示を行った場合には、原則として本契約の解除は行わないものとする。

再建計画とは次のaないしcの全てに該当するものをいう。

a 次の(a)又は(b)に定める場合に従い、当該(a)又は(b)に定める事項に該当すること。

(a) 甲が法律の規定に基づく再生手続又は更生手続を必要とするに至った場合

当該再建計画が、再生計画又は更生計画として裁判所の認可を得られる見込みがあるものであること。

(b) 甲が前号cに規定する合意を行った場合

当該再建計画が、前号cに規定する債権者又は第三者の合意を得ているものであること。

b 当該再建計画に次の(a)及び(b)に掲げる事項が記載されていること。

(a) 当該上場有価証券の全部を消却するものでないこと。

(b) 前aの(a)に規定する見込みがある旨及びその理由又は同(b)に規定する合意がなされていること及びそれを証する内容

c 当該再建計画に上場廃止の原因となる事項が記載されているなど公益又は投資者保護の観点から適当でないと認められるものでないこと。

⑤ 事業活動の停止

甲が事業活動を停止した場合(甲及びその連結子会社の事業活動が停止されたと乙が認めた場合をいう)又はこれに準ずる状態になった場合。

なお、これに準ずる状態になった場合とは、次のaからcまでに掲げる場合その他甲が事業活動を停止した場合に準ずる状態になった場合と乙が認めた場合をいうものとし、当該aからcまでに掲げる場合には当該aからcまでに掲げる日に同号に該当するものとして取り扱う。

- a 甲が、合併により解散する場合のうち、合併に際して甲の株主に対してその株券等に代わる財産の全部又は一部として次の(a)又は(b)に該当する株券等を交付する場合は、原則として、合併がその効力を生ずる日の3日前(休業日を除外する。)の日
 - (a) TOKYO PRO Market の上場株券等
 - (b) 上場株券等が、その発行者である甲の合併による解散により上場廃止となる場合 当該合併に係る新設会社若しくは存続会社又は存続会社の親会社(当該会社が発行者である株券等を当該合併に際して交付する場合に限る)が上場申請を行い、速やかに上場される見込みのある株券等
- b 甲が、前aに規定する合併以外の合併により解散する場合は、甲から当該合併に関する株主総会(普通出資者総会を含む)の決議についての書面による報告を受けた日(当該合併について株主総会の決議による承認を要しない場合には、取締役会の決議(委員会設置会社にあつては、執行役の決定を含む)についての書面による報告を受けた日)。
- c 甲が、a及び前bに規定する事由以外の事由により解散する場合((3)bの規定の適用を受ける場合を除く。)は、甲から当該解散の原因となる事由が発生した旨の書面による報告を受けた日。

⑥ 不適当な合併等

甲が非上場会社の吸収合併又はこれに類する行為(i 非上場会社を完全子会社とする株式交換、ii 会社分割による非上場会社からの事業の承継、iii 非上場会社からの事業の譲受け、iv 会社分割による他の者への事業の承継、v 他の者への事業の譲渡、vi 非上場会社との業務上の提携、vii 第三者割当による株式若しくは優先出資の割当て、viii その他非上場会社の吸収合併又はこれらiからviiまでと同等の効果をもたらすと認められる行為)を行った場合で、当該上場会社が実質的な存続会社でないとして乙が認めた場合。

⑦ 支配株主との取引の健全性の毀損

第三者割当により支配株主が異動した場合(当該割当により支配株主が異動した場合及び当該割当により交付された募集株式等の転換又は行使により支配株主が異動する見込みがある場合)において、支配株主との取引に関する健全性が著しく毀損されていると乙が認めるとき

⑧ 有価証券報告書又は四半期報告書ならびに発行者情報等の提出遅延

甲が提出の義務を有する有価証券報告書又は四半期報告書ならびに発行者情報等につき、法令及び上場規程等に定める期間内に提出しなかった場合で、乙がその遅延理由が適切でないとして判断した場合

⑨ 虚偽記載又は不適正意見等

次のa又はbに該当する場合

- a 甲が開示書類等に虚偽記載を行い、かつ、その影響が重大であると乙が認める場合
- b 甲の財務諸表等に添付される監査報告書等において、公認会計士等によって、監査報告書については「不適正意見」又は「意見の表明をしない」旨(天災地変等、甲の責めに帰すべからざる事由によるものである場合を除く。)が記載され、かつ、その影響が重大であると乙が認める場合

⑩ 法令違反及び上場規程違反等

甲が重大な法令違反又は上場規程に関する重大な違反を行った場合。

⑪ 株式事務代行機関への委託

甲が株式事務を(株)東京証券取引所の承認する株式事務代行機関に委託しないこととなった場合又は委託しないこととなることが確実となった場合。

⑫ 株式の譲渡制限

甲が当該銘柄に係る株式の譲渡につき制限を行うこととした場合。

⑬ 完全子会社化

甲が株式交換又は株式移転により他の会社の完全子会社となる場合。

⑭ 指定振替機関における取扱い

甲が指定振替機関の振替業における取扱いの対象とならないこととなった場合

⑮ 株主の権利の不当な制限

株主の権利内容及びその行使が不当に制限されているとして、甲が次の a から g までのいずれかに掲げる行為を行っているとして乙が認めた場合でかつ株主及び投資者の利益を侵害するおそれ大きいと乙が認める場合、その他株主の権利内容及びその行使が不当に制限されていると乙が認めた場合。

- a 買収者以外の株主であることを行使又は割当ての条件とする新株予約権を株主割当て等の形で発行する買収防衛策（以下「ライツプラン」という。）のうち、行使価額が株式の時価より著しく低い新株予約権を導入時点の株主等に対し割り当てておくものの導入（実質的に買収防衛策の発動の時点の株主に割り当てるために、導入時点において暫定的に特定の者に割り当てておく場合を除く。）
- b ライツプランのうち、株主総会で取締役の過半数の交代が決議された場合においても、なお廃止又は不発動とすることができないものの導入
- c 拒否権付種類株式のうち、取締役の過半数の選解任その他の重要な事項について種類株主総会の決議を要する旨の定めがなされたものの発行に係る決議又は決定（持株会社である甲の主要な事業を行っている子会社が拒否権付種類株式又は取締役選任権付種類株式を甲以外の者を割当先として発行する場合において、当該種類株式の発行が甲に対する買収の実現を困難にする方策であると乙が認めるときは、甲が重要な事項について種類株主総会の決議を要する旨の定めがなされた拒否権付種類株式を発行するものとして取り扱う。）
- d 上場株券等について、株主総会において議決権を行使することができる事項のうち取締役の過半数の選解任その他の重要な事項について制限のある種類の株式への変更に係る決議又は決定。
- e 上場株券等より議決権の多い株式（取締役の選解任その他の重要な事項について株主総会において一個の議決権を行使することができる数の株式に係る剰余金の配当請求権その他の経済的利益を受ける権利の価額等が上場株券等より低い株式をいう。）の発行に係る決議又は決定。
- f 議決権の比率が 300% を超える第三者割当に係る決議又は決定。ただし、株主及び投資者の利益を侵害するおそれが少ないと乙が認める場合は、この限りでない。
- g 株主総会における議決権を失う株主が生じることとなる株式併合その他同等の効果をもたらす行為に係る決議又は決定。

⑯ 全部取得

甲が当該銘柄に係る株式の全部を取得する場合。

⑰ 反社会的勢力の関与

甲が反社会的勢力の関与を受けている事実が判明した場合において、その実態が TOKYO PRO Market に対する株主及び投資者の信頼を著しく毀損したと乙が認めるとき。

⑱ その他

前各号のほか、公益又は投資者保護のため、乙もしくは(株)東京証券取引所が当該銘柄の上場廃止を適当と認めた場合。

<J-Adviser 契約解除に係る事前催告に関する事項>

1. いずれかの当事者が、本契約に基づく義務の履行を怠り、又は、その他本契約違反を犯した場合、相手方は、相当の期間（特段の事情のない限り 1 ヶ月とする。）を定めてその違反の是正又は義務の履行を書面で催告し、その催告期間内にその違反の是正又は義務の履行がなされなかったときは本契約を解除することができる。
2. 前項の定めにかかわらず、甲及び乙は、合意により本契約期間中いつでも本契約を解除することができる。また、いずれかの当事者から相手方に対し、1 ヶ月前に書面で通知することにより本契約を解除することができる。
3. 契約解除する場合、特段の事情のない限り乙は、あらかじめ本契約を解除する旨を(株)東京証券取引所に通知しなければならない。

5【経営上の重要な契約等】

事業譲受

当社は、2018年7月13日開催の取締役会において、システム情報開発株式会社が運営する新聞編集システム関連の開発を主要業務とするシステム開発事業を譲り受けることを決議し、同日付で事業譲受契約を締結いたしました。

なお、2018年8月1日付で事業譲受を完了いたしました。

6【研究開発活動】

該当事項はありません。

7【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末日現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されております。この連結財務諸表の作成にあたって、見積りが必要な事項につきましては、一定の会計基準の範囲内にて合理的な基準に基づき、会計上の見積りを行っております。これらの見積りについては、過去の実績等を勘案し合理的に判断しておりますが、実際の結果は、見積りによる不確実性のため、これらの見積りとは異なることがあります。

(2) 財政状態の分析

(流動資産)

当連結会計年度末における流動資産の残高は250,282千円で、前連結会計年度末と比べ82,802千円減少しております。これは、現金及び預金の減少104,974千円、売掛金の増加29,577千円等が主な要因であります。

(固定資産)

当連結会計年度末における固定資産の残高は371,588千円で、前連結会計年度末と比べ2,918千円増加しております。これは、のれんの増加19,287千円、機械装置及び運搬具の増加13,888千円、保険積立金の増加3,881千円、減価償却累計額の増加37,303千円等が主な要因であります。

(流動負債)

当連結会計年度末における流動負債の残高は182,484千円で、前連結会計年度末と比べ50,505千円減少しております。これは、買掛金の減少63,100千円、1年内返済予定の長期借入金の増加8,602千円等が主な要因であります。

(固定負債)

当連結会計年度末における固定負債の残高は320,266千円で、前連結会計年度末と比べ9,474千円減少しております。これは、長期借入金の減少10,031千円等が主な要因であります。

(純資産)

当連結会計年度末における純資産の残高は119,351千円で、前連結会計年度末と比べ19,981千円減少しております。これは、利益剰余金の減少18,830千円等が主な要因であります。

(3) 経営成績の分析

「第3【事業の状況】 1【業績等の概要】 (1)業績」に記載のとおりであります。

(4) キャッシュ・フローの分析

「第3【事業の状況】 1【業績等の概要】 (2)キャッシュ・フローの状況」に記載のとおりであります。

第4【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当連結会計年度において実施した設備投資の総額は、13,988千円であります。その主な内容は、実証実験プロジェクトにおける船舶の取得に関するものであります。

2【主要な設備の状況】

当社グループにおける主要な設備は、次の通りであります。

(1) 提出会社

2019年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の 内容	帳簿価額					従業員 数(人)
			建物及び構築物 (千円)	機械装置及び 運搬具 (千円)	土地 (千円)	その他 (千円)	合計 (千円)	
本社 (川崎市宮前区)	全社共通 I T関連事業	事務所	172	0	—	0	172	2(5)
沖縄ブランチオフィス (沖縄県那覇市)	I T関連事業 再生可能エネル ギー活用事業	事務所	843	3,472	—	0	4,315	9(6)
荻窪サテライトオフィ ス (東京都杉並区)	I T関連事業	事務所	622	—	—	58	681	10(2)
芝大門サテライトオフ イス (東京都港区)	I T関連事業	事務所	—	—	—	—	—	6(—)

- (注) 1. 上記金額には消費税等は含まれておりません。
 2. 従業員数の()は、臨時雇用者数を外書きで記載しております。
 3. 上記の他、主要な賃貸している設備として、以下のものがあります。

事業所 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	年間賃貸料 (千円)
本社 (川崎市宮前区)	全社共通 I T関連事業	事務所	6,202
沖縄ブランチオフィス (沖縄県那覇市)	I T関連事業 再生可能エネル ギー活用事業	事務所	3,790
荻窪サテライトオフィ ス (東京都杉並区)	I T関連事業	事務所	5,839
芝大門サテライトオフ イス (東京都港区)	I T関連事業	事務所	1,647

(注) 上記金額には消費税等は含まれておりません。

(2) 国内子会社

事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の 内容	帳簿価額					従業員 数(人)
			建物及び構築物 (千円)	機械装置及び 運搬具 (千円)	土地 (千円) (面積㎡)	その他 (千円)	合計 (千円)	
コンピュータマインド エナジー1株式会社	再生可能エネル ギー活用事業	土地 太陽光 発電所	111,844	133,169	30,960 (14,185)	—	275,974	—

(注) 太陽光発電所における売電事業であり、所属する従業員が居ないため従業員数については記載を省略しております。

なお、管理は協力会社に委託しております。

3【設備の新設、除却等の計画】

該当事項はありません。

第5【発行者の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

記名・無記名の別、額面・無額面の別及び種類	発行可能株式総数(株)	未発行株式数(株)	連結会計年度末現在発行数(株) (2019年3月31日)	公表日現在発行数(株) (2019年6月28日)	上場金融商品取引所名又は登録認可金融商品取引業協会名	内容
普通株式	1,740,000	1,290,000	450,000	450,000	東京証券取引所 (TOKYO PRO Market)	権利内容に何ら限定のない当社における標準なる株式であり、単元株式数は100株です。
計	1,740,000	1,290,000	450,000	450,000	—	—

(2)【新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【MSCB等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

(5)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総数増減数(株)	発行済株式総数残高(株)	資本金増減額(千円)	資本金残高(千円)	資本準備金増減額(千円)	資本準備金残高(千円)
2018年4月1日～ 2019年3月31日	—	450,000	—	35,000	—	15,000

(6)【所有者別状況】

2019年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満株式の状況(株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	—	—	—	1	—	—	74	75	—
所有株式数(単元)	—	—	—	33	—	—	4,467	4,500	—
所有株式数の割合(%)	—	—	—	0.7	—	—	99.3	100	—

(注) 自己株式2,500株は「個人その他」に25単元含まれております。

(7) 【大株主の状況】

2019年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (株)	発行済株式（自己 株式を除く）総数 に対する所有株式 数の割合(%)
竹内 次郎	川崎市中原区	289,500	64.7
松澤 献一	東京都世田谷区	36,000	8.0
東 時生	沖縄県那覇市	30,000	6.7
小木曾 有夏	東京都杉並区	24,000	5.4
黒木 誠	川崎市中原区	20,000	4.5
豊里 友樹	沖縄県浦添市	6,700	1.5
北島 金吾	川崎市中原区	5,000	1.1
株式会社E-Light	大阪市浪速区大国1-11-8	3,300	0.7
飯塚 紀夫	福井県福井市	2,000	0.4
井上 健志	埼玉県草加市	2,000	0.4
小林 朋寿	埼玉県飯能市	2,000	0.4
計	—	420,500	94.0

(注) 上記のほか当社所有の自己株式2,500株があります。

(8) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

2019年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 2,500	—	—
完全議決権株式(その他)	普通株式 447,500	4,475	権利内容に何ら限定のない、当社における標準となる株式であり、単元株式数は100株であります。
単元未満株式	—	—	—
発行済株式総数	450,000	—	—
総株主の議決権	—	4,475	—

② 【自己株式等】

2019年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株 式数 (株)	他人名義所有株 式数 (株)	所有株式数の合 計 (株)	発行済株式総数 に対する所有株 式数の割合 (%)
(自己保有株式) コンピュータマイ ンド株式会社	川崎市宮前区宮崎二丁目10-9	2,500	—	2,500	0.6
計	—	2,500	—	2,500	0.6

(9) 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

(10) 【従業員株式所有制度の内容】

該当事項はありません。

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第 155 条第 3 号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

区分	株式数 (株)	価額の総額 (千円)
取締役会 (2018年 9 月 26 日) での決議状況 (取得期間2018年10月 9 日～2018年10月19日)	6,000	3,000
最近事業年度前における取得自己株式	—	—
最近事業年度における取得自己株式 (2018年 4 月 1 日～2019年 3 月 31 日)	2,500	1,250
残存決議株式の総数及び価額の総額	3,500	1,750
最近事業年度の末日現在の未行使割合 (%)	58.3	58.3
最近期間における取得自己株式	—	—
公表日現在の未行使割合 (%)	58.3	58.3

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

該当事項はありません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	最近事業年度		最近期間	
	株式数 (株)	処分価額の 総額 (円)	株式数 (株)	処分価額の 総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った 取得自己株式	—	—	—	—
その他 (—)	—	—	—	—
保有自己株式	2,500	—	2,500	—

(注) 最近期間の保有自己株式数には、2019年6月1日から発行者情報公表日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

3【配当政策】

当社の剰余金の配当は、期末配当の年1回を基本的な方針としております。期末配当の決定機関は、株主総会でありま
す。当社の配当政策に関する基本的な考え方は、会社の成長と内部留保の充実に努めると共に、投資家の皆様に適正な利益
還元を行うことでもあります。

以上の方針に則り、第42期の剰余金の期末配当につきましては、親会社の当期業績並びに財務状況等を勘案いたしまし
て、1株につき8円00銭とし、前期比2円00銭の減配といたしました。

なお、今後も投資家の皆様への利益還元を重要な経営課題とし、事業拡大の為に必要な内部留保を勘案しつつ、財政状態
及び経営成績に応じた剰余金の配当により投資家の皆様への利益還元を努める所存であります。

基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、以下の通りであります。

決算年月日	配当金の総額 (千円)	1株当たり配当額 (円)
2019年6月27日(木) 定時株主総会決議	3,580	8

4【株価の推移】

(1)【最近3年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第40期	第41期	第42期
決算年月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
最高(円)	600	—	500
最低(円)	500	—	500

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所 TOKYO PRO Market における取引価格であります。

(2)【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	2018年10月	11月	12月	2019年1月	2月	3月
最高(円)	500	—	—	—	—	—
最低(円)	500	—	—	—	—	—

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所 TOKYO PRO Market における取引価格であります。

5【役員の状況】

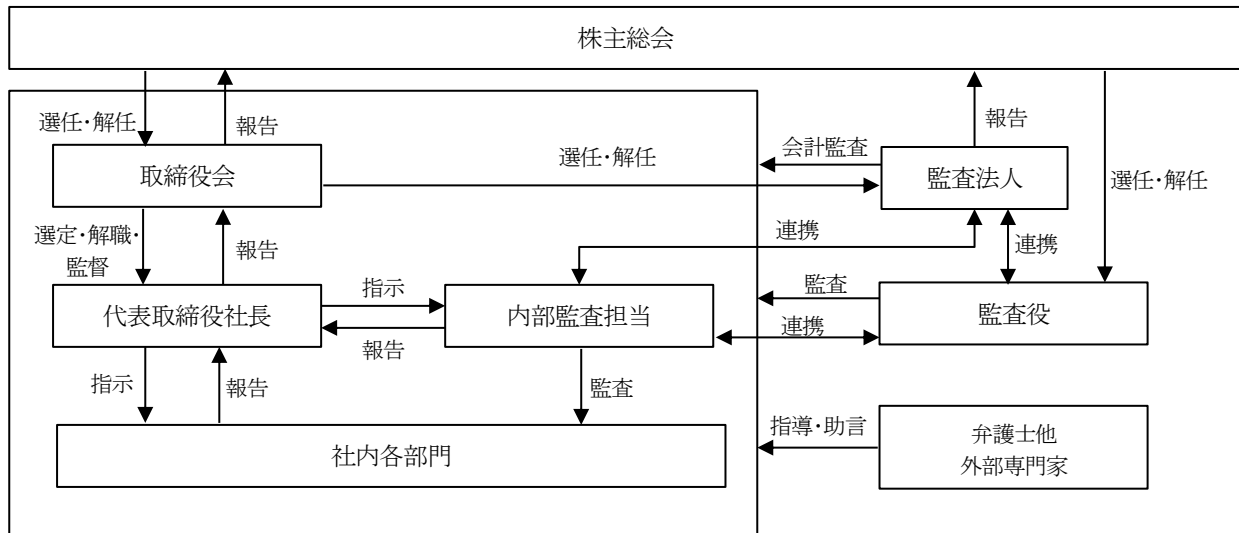
男性4名 女性1名（役員のうち女性の比率20%）

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	報酬	所有株式数 (株)
代表取締役 執行役員	社長	竹内 次郎	1960年3月20日生	1980年4月 1992年9月 1999年9月	当社 入社 当社 取締役就任 当社 代表取締役社長就任(現任)	(注)1	(注)3	289,500
取締役 執行役員	専務 IT関連 事業担当	松澤 献一	1962年11月5日生	1982年4月 1998年11月	当社 入社 当社 取締役就任(現任)	(注)1	(注)3	36,000
取締役 執行役員	再生可能 エネルギー 活用事業 担当	東 時生	1967年6月25日生	1992年4月 1994年4月 1999年9月	株式会社スペースプライ 入社 当社 入社 当社 取締役就任(現任)	(注)1	(注)3	30,000
取締役 執行役員	常務 財務総務 担当	小木曾 有夏	1973年5月25日生	1994年4月 2010年6月	当社 入社 当社 取締役就任(現任)	(注)1	(注)3	24,000
監査役 (常勤)	—	大場 衛	1947年3月11日生	1969年4月 1974年6月 1983年7月 2018年9月	株式会社ビジコン 入社 株式会社バンキングシステム 入社 システム情報開発株式会社設立 同社 代表取締役就任 当社 監査役就任(現任)	(注)2	(注)3	500
計							—	380,000

- (注) 1. 取締役の任期は、選任後2年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会の終結の時までであります。
 2. 監査役の任期は、選任後4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会の終結の時までであります。
 3. 2019年3月期における役員報酬の総額については、「6【コーポレート・ガバナンスの状況等】(1)【コーポレート・ガバナンスの状況】⑦役員報酬の内容に記載のとおりです。
 4. 監査役大場衛氏は、会社法第2条第16項に定める社外監査役であります。

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】



①コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は公正かつ効率的な経営に取り組むにあたり、コーポレート・ガバナンスが重要な課題であると認識しております。そのため、経営の意思決定の内容及び過程を明確にし、利害関係者の意思や利益を適切に反映していくように努めております。

②会社の機関の内容

イ. 取締役会

当社の取締役会は、4名の取締役で構成されております。

取締役会は、法令、定款及び株主総会決議に基づき、決裁権限規程、取締役会規程その他の当社諸規程等の会社運営の基礎となる諸基準を整備し、取締役の職務執行の適正性及び効率性を確保しております。なお、定例取締役会が毎月1回、その他必要に応じて臨時取締役会が開催され、経営に関する重要事項を決定しております。

取締役は、会社の業務執行状況を取締役会に報告するものとしており、これをもとに、取締役会は取締役の職務執行を監督しております。

ロ. 監査役

当社は監査役制度を採用しており、1名で構成されております。

監査役は、監査役規程に基づき、取締役の業務執行状況を適正に監査しております。また、監査役は取締役会に出席し、取締役の職務の執行状況を監視するとともに、適宜必要な意見を述べております。

ハ. 会計監査

当社は、監査法人やまぶきと監査契約を締結し、独立した立場から「特定上場有価証券に関する有価証券上場規程の特例」第128条第3項の規定に基づき監査を受けております。なお2019年3月期において監査を執行した公認会計士は西岡朋晃氏、平野泰久氏の2名であり、いずれも継続監査年数は7年以内であります。また当該監査業務にかかる補助者は4名であります。

なお当社と監査に従事する公認会計士及びその補助者との間には特別の利害関係はありません。

③内部統制システムの整備の状況

当社は、職務権限規程の遵守により、業務を合理的に分担することで、特定の組織並びに特定の担当者に業務や権限が集中することを回避し、内部牽制機能が適切に働くよう努めております。

④内部監査及び監査役の状況

当社の内部監査は、管理部が主管部署として、業務を監査しております。つぎに管理部の監査は、代表取締役社長及び業務部が実施しており、相互に牽制する体制をとっております。各部の監査結果並びに改善点につきましては、内部監査担当者より、代表取締役社長に対し報告書並びに改善要望書を提出する体制をとっております。

⑤リスク管理体制の整備の状況

当社のリスク管理体制は、リスク管理の主管部署として管理部が情報の一元化を行っております。また、当社は企業経営及び日常の業務に関して、必要に応じて弁護士等の複数の専門家から経営判断上の参考とするためのアドバイスを受ける体制をとっております。

⑥社外監査役の状況

当社は社外監査役を1名選任しております。社外監査役は、経営に対する監視、監督機能を担っております。

社外監査役大場衛氏は、当社との間には人的関係、資本的关系、または、取引関係その他の利害関係はありません。

なお、当社は、社外監査役の独立性に関する基準または方針について特段の定めはありませんが、選任に際しては、客観的、中立的な経営監視機能が十分に発揮されるよう、取引関係等を考慮した上で、選任を行っております。

⑦役員報酬の内容

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額 (千円)			対象となる 役員の員数 (人)
		基本報酬	賞与	ストック オプション	
取締役（社外取締役を除く）	25,398	25,398	—	—	4
社外監査役	2,301	2,301	—	—	1

⑧取締役及び監査役の定数

当社の取締役は5名以内、監査役は3名以内とする旨を定款で定めております。

⑨取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨及び累積投票によらないものとする旨を定款で定めております。

⑩株主総会の特別決議要件

当社は、株主総会の円滑な運営を行うため、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款で定めております。

⑪自己の株式の取得

当社は、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議をもって、自己の株式を取得することができる旨を定款に定めております。これは、経営環境の変化に対応した機動的な資本政策の遂行を可能とするため、市場取引等により自己の株式を取得することを目的とするものであります。

⑫取締役及び監査役の責任免除

当社は、職務の遂行にあたり期待される役割を十分に発揮できる環境を整備するため、会社法第 426 条第 1 項の規定により、任務を怠った取締役（取締役であったものを含む。）及び監査役（監査役であったものを含む。）の損害賠償責任を法令の限度において、取締役会の決議によって免除できる旨を定款に定めております。

⑬社外監査役との責任限定契約の内容の概要

当社は、会社法第 427 条第 1 項の規定に基づき、同法第 423 条第 1 項の損害賠償責任を限定する契約を社外監査役と締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、法令が定める最低限度額としております。なお、当該責任限定契約が認められるのは、当該社外監査役が責任の原因となった職務の遂行について善意でかつ重大な過失がないときに限られます。

⑭株式の保有状況

該当事項はありません。

⑮支配株主との取引を行う際における少数株主の保護の方策に関する指針

支配株主との取引が発生する場合には、当該取引条件を一般の取引条件と同等の条件に照らし合わせて決定し、かつ、公正で適切な取引関係の維持に努めることにより、少数株主の利益を害することのないように対応いたします。関連当事者取引については、取引の際に取締役会の承認を必要といたします。このような運用を行うことで、関連当事者取引を取締役会において適時把握し、少数株主の利益を損なう取引を排除する体制を構築しております。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査法人に対する報酬の内容】

区分	最近連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（千円）	非監査業務に基づく報酬（千円）
発行者	4,500	—
連結子会社	—	—
合計	4,500	—

② 【その他重要な報酬の内容】

該当事項はありません。

③ 【監査法人の発行者に対する非監査業務の内容】

該当事項はありません。

④ 【監査報酬の決定方針】

当社の事業規模及び監査日数、業務内容等の監査計画に基づき監査法人と協議の上決定しております。

第6【経理の状況】

1. 連結財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号。以下、「連結財務諸表規則」という。）に基づいて作成しております。

なお、当連結会計年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の連結財務諸表に含まれる比較情報のうち、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則等の一部を改正する内閣府令」（平成30年3月23日内閣府令第7号。以下「改正府令」という。）による改正後の連結財務諸表規則第15条の5第2項第2号及び同条第3項に係るものについては、改正府令附則第3条第2項により、改正前の連結財務諸表規則に基づいて作成しております。

- (2) 当社の連結財務諸表については、株式会社東京証券取引所の「特定上場有価証券に関する有価証券上場規程の特例の施行規則」第116条第3項で認められた会計基準のうち、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して作成しております。

2. 監査証明について

当社は、株式会社東京証券取引所の「特定上場有価証券に関する有価証券上場規程の特例」第128条第3項の規定に基づき、当連結会計年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の連結財務諸表について、監査法人やまぶきにより監査を受けております。

なお、当社の監査人は次のとおり交代しております。

第41期連結会計年度の連結財務諸表 リンクス有限責任監査法人

第42期連結会計年度の連結財務諸表 監査法人やまぶき

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	※ 199,481	※ 94,506
売掛金	※ 122,440	※ 152,018
その他	11,873	4,646
貸倒引当金	△710	△889
流動資産合計	333,084	250,282
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	※ 135,615	※ 135,615
機械装置及び運搬具	※ 175,090	※ 188,978
土地	※ 30,960	※ 30,960
その他	2,997	3,097
減価償却累計額	△40,204	△77,508
有形固定資産合計	304,459	281,143
無形固定資産		
のれん	-	19,287
その他	660	553
無形固定資産合計	660	19,840
投資その他の資産		
投資有価証券	4,518	4,649
繰延税金資産	2,015	2,030
保険積立金	28,458	32,339
その他	28,558	31,583
投資その他の資産合計	63,550	70,603
固定資産合計	368,669	371,588
繰延資産		
開業費	309	232
繰延資産合計	309	232
資産合計	702,064	622,103

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	143,302	80,201
1年内返済予定の長期借入金	※ 52,644	※ 61,246
未払法人税等	865	777
賞与引当金	7,500	11,003
その他	28,678	29,257
流動負債合計	232,990	182,484
固定負債		
長期借入金	※ 323,866	※ 313,835
資産除去債務	5,546	6,431
長期未払金	328	-
固定負債合計	329,741	320,266
負債合計	562,731	502,751
純資産の部		
株主資本		
資本金	35,000	35,000
資本剰余金	15,000	15,000
利益剰余金	89,673	70,842
自己株式	-	△1,250
株主資本合計	139,673	119,592
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	△339	△241
その他の包括利益累計額合計	△339	△241
純資産合計	139,333	119,351
負債純資産合計	702,064	622,103

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高	497,714	443,215
売上原価	417,394	361,014
売上総利益	80,319	82,201
販売費及び一般管理費	※ 72,642	※ 90,730
営業利益又は営業損失(△)	7,676	△8,528
営業外収益		
受取利息及び配当金	5	4
その他	168	60
営業外収益合計	173	65
営業外費用		
支払利息	4,839	5,045
その他	77	90
営業外費用合計	4,917	5,136
経常利益又は経常損失(△)	2,933	△13,600
特別利益		
投資有価証券売却益	95	-
特別利益合計	95	-
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前 当期純損失(△)	3,028	△13,600
法人税、住民税及び事業税	866	777
法人税等調整額	1,825	△48
法人税等合計	2,691	729
当期純利益又は当期純損失(△)	336	△14,330
親会社株主に帰属する当期純利益又は 親会社株主に帰属する当期純損失(△)	336	△14,330

【連結包括利益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
当期純利益又は当期純損失(△)	336	△14,330
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	△339	98
その他の包括利益合計	△339	98
包括利益	△3	△14,231
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	△3	△14,231

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：千円）

項目	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	35,000	15,000	98,038	—	148,038
過去の誤謬の訂正による累積的影響額	—	—	△2,852	—	△2,852
遡及処理後当期首残高	35,000	15,000	95,186	—	145,186
当期変動額					
剰余金の配当	—	—	△5,850	—	△5,850
自己株式の取得	—	—	—	—	—
親会社株主に帰属する当期純利益	—	—	336	—	336
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	—	—	—	—	—
当期変動額合計	—	—	△5,513	—	△5,513
当期末残高	35,000	15,000	89,673	—	139,673

項目	その他の包括利益累計額		純資産合計
	その他有価証券評価差額金	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	—	—	148,038
過去の誤謬の訂正による累積的影響額	—	—	△2,852
遡及処理後当期首残高	—	—	145,186
当期変動額			
剰余金の配当	—	—	△5,850
自己株式の取得	—	—	—
親会社株主に帰属する当期純利益	—	—	336
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△339	△339	△339
当期変動額合計	△339	△339	△5,853
当期末残高	△339	△339	139,333

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：千円）

項目	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	35,000	15,000	89,673	—	139,673
過去の誤謬の訂正による累積的影響額	—	—	—	—	—
遡及処理後当期首残高	35,000	15,000	89,673	—	139,673
当期変動額					
剰余金の配当	—	—	△4,500	—	△4,500
自己株式の取得	—	—	—	△1,250	△1,250
親会社株主に帰属する当期純損失（△）	—	—	△14,330	—	△14,330
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	—	—	—	—	—
当期変動額合計	—	—	△18,830	△1,250	△20,080
当期末残高	35,000	15,000	70,842	△1,250	119,592

項目	その他の包括利益累計額		純資産合計
	その他有価証券評価差額金	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	△339	△339	139,333
過去の誤謬の訂正による累積的影響額	—	—	—
遡及処理後当期首残高	△339	△339	139,333
当期変動額			
剰余金の配当	—	—	△4,500
自己株式の取得	—	—	△1,250
親会社株主に帰属する当期純損失（△）	—	—	△14,330
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	98	98	98
当期変動額合計	98	98	△19,981
当期末残高	△241	△241	119,351

④ 【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期 純損失(△)	3,028	△13,600
減価償却費	25,864	37,410
のれん償却額	—	1,753
貸倒引当金の増減額(△は減少)	454	178
受取利息及び配当金	△5	△4
支払利息	4,839	5,045
投資有価証券売却益	△20	—
売上債権の増減額(△は増加)	△76,962	△29,577
仕入債務の増減額(△は減少)	135,701	△63,100
未払消費税等の増減額(△は減少)	△234	1,055
賞与引当金の増減額(△は減少)	—	3,503
その他	20,845	10,526
小計	113,512	△46,810
利息及び配当金の受取額	5	4
利息の支払額	△4,839	△5,045
法人税等の支払額	△598	△865
営業活動によるキャッシュ・フロー	108,079	△52,716
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	—	△15,000
事業譲受による支出	—	△22,416
有形固定資産の取得による支出	△70,531	△13,988
その他	△1,142	△8,672
投資活動によるキャッシュ・フロー	△71,674	△60,078
財務活動によるキャッシュ・フロー		
長期借入金による収入	118,500	60,000
長期借入金の返済による支出	△50,466	△61,429
自己株式の取得による支出	—	△1,250
配当金の支払額	△5,850	△4,500
財務活動によるキャッシュ・フロー	62,184	△7,179
現金及び現金同等物の増減額(△は減少)	98,589	△119,974
現金及び現金同等物の期首残高	100,892	199,481
現金及び現金同等物の期末残高	※ 199,481	※ 79,506

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

すべての子会社を連結しております。

連結子会社の数 1社

連結子会社の名称

コンピュータマインドエナジー1株式会社

2. 持分法の適用に関する事項

該当事項はありません。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は、連結決算日と一致しております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は、移動平均法により算定）を採用しております。

時価のないもの

移動平均法による原価法を採用しております。

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

①有形固定資産

定率法を採用しております。

ただし、1998年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備は除く）並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物及び構築物 10年～17年

機械装置及び運搬具 2年～17年

②無形固定資産

定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

①貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

②賞与引当金

従業員の賞与の支給に備えるため、支給見込み額に基づき、当連結会計年度に対応する金額を計上しております。

(4) 重要な収益及び費用の計上基準

完成工事高の計上基準

工事進行基準（工事の進捗率の見積りは原価比例法）によっております。

(5) のれんの償却方法及び償却期間

投資効果の発現する期間を合理的に見積り、その見積期間に応じて均等償却しております。

ただし、金額的に重要性がないものについては発生時に一括償却しております。

(6) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(7) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

①繰延資産

開業費

効果の及ぶ期間（5年間）にわたり、均等償却しております。

②消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は税抜方式によっております。

(未適用の会計基準等)

- ・「収益認識に関する会計基準」（企業会計基準第29号 平成30年3月30日）
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日）

(1) 概要

収益認識に関する包括的な会計基準であります。収益は、次の5つのステップを適用し認識されます。

ステップ1：顧客との契約を識別する。

ステップ2：契約における履行義務を識別する。

ステップ3：取引価格を算定する。

ステップ4：契約における履行義務に取引価格を配分する。

ステップ5：履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する。

(2) 適用予定日

2022年3月期の期首より適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

影響額は、当連結財務諸表の作成時において評価中であります。

(表示方法の変更)

(連結貸借対照表)

前連結会計年度において、独立掲記しておりました以下の科目につきましては、金額的重要性が乏しくなったため、当連結会計年度より他の科目に含めて表示しております。

「流動資産」の「棚卸資産」「未収入金」「前払費用」「預け金」は、「その他」に、「有形固定資産」の「建物」「建物付属設備」「構築物」は、「建物及び構築物」に、「機械及び装置」「車輛運搬具」は、「機械装置及び運搬具」に、「工具器具備品」は「その他」に、「無形固定資産」の「電話加入権」「ソフトウェア」は「その他」に、「投資その他の資産」の「出資金」「長期前払費用」「敷金・保証金」は、「その他」に、「流動負債」の「未払金」「未払費用」「未払消費税等」は「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」に表示していた「棚卸資産」254千円、「未収入金」2,913千円、「前払費用」3,138千円、「預け金」5,020千円、「その他」546千円は、「その他」11,873千円として、「有形固定資産」に表示していた「建物」2,166千円、「建物付属設備」5,531千円、「構築物」127,917千円は、「建物及び構築物」135,615千円として、「機械及び装置」171,342千円、「車輛運搬具」3,747千円は、「機械装置及び運搬具」175,090千円として、「工具器具備品」2,997千円は、「その他」2,997千円として、「無形固定資産」に表示していた「電話加入権」358千円、「ソフトウェア」301千円は、「その他」660千円として、「投資その他の資産」に表示していた「出資金」101千円、「長期前払費用」17,190千円、「敷金・保証金」10,766千円は、「その他」28,558千円として、「流動負債」に表示していた「未払金」4,199千円、「未払費用」19,569千円、「未払消費税等」4,388千円、「その他」521千円は、「その他」28,678千円として組替えております。

(連結キャッシュ・フロー計算書)

前連結会計年度において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「その他負債の増減額(△は減少)」に含めておりました「未払消費税等の増減額(△は減少)」は、重要性が増したため、当連結会計年度より独立掲記しております。また、「営業活動によるキャッシュ・フロー」に独立掲記しておりました「棚卸資産の増減額(△は増加)」、「前払費用の増加額(△は増加)」、「未収入金の増加額(△は増加)」、「預け金の増減額(△は減少)」、「その他資産の増減額(△は増加)」、「未払金の増減額(△は減少)」、「未払費用の増減額(△は減少)」、「その他負債の増減額(△は減少)」は、金額的重要性が乏しくなったため、「その他」に含めて表示しております。さらに、「投資活動によるキャッシュ・フロー」に独立掲記しておりました「保険積立金の支出」は、金額的重要性が乏しくなったため、「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」に表示しておりました「たな卸資産の増減額(△は増加)」95千円、「前払費用の増加額(△は増加)」△371千円、「未収入金の増加額(△は増加)」17,381千円、「預け金の増減額(△は減少)」△5,020千円、「その他資産の増減額(△は増加)」△4,349千円、「未払金の増減額(△は減少)」4,178千円、「未払費用の増減額(△は減少)」3,817千円、「その他負債の増減額(△は減少)」5,069千円は、「未払消費税等の増減額(△は減少)」△234千円、「その他」20,845千円として、「投資活動によるキャッシュ・フロー」に表示しておりました「保険積立金の支出」△3,763千円、「その他」2,620千円は、「その他」△1,142千円として組替えております。

(『税効果会計に係る会計基準』の一部改正)の適用に伴う変更)

『税効果会計に係る会計基準』の一部改正(企業会計基準第28号 平成30年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。)を当連結会計年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更するとともに税効果会計関係注記を変更しました。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」1,883千円は、「投資その他の資産」の「繰延税金資産」2,015千円に含めて表示しております。

また、税効果会計関係注記において、税効果会計基準一部改正第3項から第5項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(評価性引当額の合計額を除く。)及び同注解(注9)に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前連結会計年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載しておりません。

(連結貸借対照表関係)

※ 担保資産および担保付債務

担保に供している資産は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
現金及び預金	21,248千円	21,896千円
売掛金	4,025千円	3,293千円
建物及び構築物	119,606千円	111,844千円
機械装置及び運搬具	150,985千円	133,169千円
土地	30,960千円	30,960千円
計	326,827千円	301,164千円

担保付債務は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
1年内返済予定の長期借入金	20,130千円	23,790千円
長期借入金	287,550千円	263,760千円
計	307,680千円	287,550千円

(連結損益計算書関係)

※ 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
役員報酬	20,836千円	28,449千円
管理諸費	11,842千円	16,112千円
賞与引当金繰入額	一千円	398千円
貸倒引当金繰入額	454千円	178千円

(表示方法の変更)

前連結会計年度において、主要な費目として表示しておりました「事務員給与」、「保険料」及び「旅費交通費」は、重要性が乏しくなったことにより、当連結会計年度より主要な費目として表示しておりません。

なお、前連結会計年度の「事務員給与」は6,535千円、「保険料」は6,034千円、「旅費交通費」は4,667千円であります。

また、前連結会計年度において、主要な費目として表示しておりませんでした「貸倒引当金繰入額」は、重要性が増したことにより、当連結会計年度より主要な費目として表示しております。

この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の金額についても記載しております。

(連結包括利益計算書関係)

※ その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	△472千円	131千円
組替調整額	—	—
税効果調整前	△472千円	131千円
税効果額	132千円	△33千円
その他有価証券評価差額金	△339千円	98千円
その他の包括利益合計	△339千円	98千円

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数に関する事項

	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
発行済株式				
普通株式(株)	450,000	—	—	450,000
合計	450,000	—	—	450,000

2. 自己株式の種類及び株式数に関する事項

該当事項はありません。

3. 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2017年6月29日 定時株主総会	普通株式	5,850	13.0	2017年3月31日	2017年6月30日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (千円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年6月28日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	4,500	10.0	2018年3月31日	2018年6月29日

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
発行済株式				
普通株式（株）	450,000	—	—	450,000
合 計	450,000	—	—	450,000
自己株式				
普通株式（株）	—	2,500	—	2,500
合 計	—	2,500	—	2,500

（変動事由の概要）

自己株式（普通株式）の株式数の増加2,500株は、2018年9月26日開催の取締役会決議による取得によるものであります。

2. 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

（1）配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 （千円）	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
2018年6月28日 定時株主総会	普通株式	4,500	10.0	2018年3月31日	2018年6月29日

（2）基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 （千円）	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
2019年6月27日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	3,580	8.0	2019年3月31日	2019年6月28日

（連結キャッシュ・フロー計算書関係）

※ 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係は、次のとおりです。

	前連結会計年度 （自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）	当連結会計年度 （自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）
現金及び預金勘定	199,481千円	94,506千円
預入期間が3ヶ月を超える定期預金	-千円	△15,000千円
現金及び現金同等物	199,481千円	79,506千円

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1)金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用については短期的な預金等に限定し、また、資金調達については銀行等の金融機関からの借入及び新株発行による方針であります。また、デリバティブ取引に関しては行わない方針であります。

(2)金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である売掛金は顧客の信用リスクに晒されております。

投資有価証券は、投資信託であり、市場価値の変動リスクに晒されております。

営業債務である買掛金等は、そのほとんどが3ヶ月以内の支払期日であります。

(3)金融商品に係るリスク管理体制

①信用リスク（取引先の契約不履行等に係るリスク）の管理

営業債権は売掛金等については、経常的に発生しており、担当者が、所定の手続きに従い、債権回収の状況を定期的にモニタリングし、支払遅延の早期把握や回収リスクの軽減を図っております。

特に金額等の重要性が高い取引については、取締役会において、取引実行の決定や回収状況の報告などを行います。

②市場リスク（為替や金利等の変動リスク）の管理

投資有価証券については、定期的に時価を把握し、市況を勘案して保有状況を継続的に見直しております。

③資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払いを実行できなくなるリスク）の管理

買掛金については月次単位での支払予定を把握するとともに、手許流動性の維持などにより流動性リスクを管理しております。

(4)金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりです。

前連結会計年度（2018年3月31日）

	連結貸借対照表 計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1)現金及び預金	199,481	199,481	—
(2)売掛金	122,440	122,440	—
資産計	321,921	321,921	—
(1)買掛金	143,302	143,302	—
(2)長期借入金（1年内返済予定を含む）	376,510	383,823	7,313
負債計	519,812	527,125	7,313

当連結会計年度（2019年3月31日）

	連結貸借対照表 計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1)現金及び預金	94,506	94,506	—
(2)売掛金	152,018	152,018	—
(3)投資有価証券 其他有価証券	4,649	4,649	—
資産計	251,174	251,174	—
(1)買掛金	80,201	80,201	—
(2)長期借入金（1年内返済予定を含む）	375,081	373,667	△1,413
負債計	455,282	453,868	△1,413

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券に関する事項

資産

(1)現金及び預金、(2)売掛金

短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(3)投資有価証券

取引金融機関から提示された価格によっております。

負債

(1)買掛金

短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(2)長期借入金（1年内返済予定を含む）

長期借入金の時価は、元利金の合計額を、新規に同様の借入を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

3. 金銭債権の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度 (2018年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	199,481	—	—	—
売掛金	122,440	—	—	—
合計	321,921	—	—	—

当連結会計年度 (2019年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	94,506	—	—	—
売掛金	152,018	—	—	—
合計	246,524	—	—	—

4. 長期借入金の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度 (2018年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
長期借入金	52,644	44,462	29,604	27,960	23,960	197,880
合計	52,644	44,462	29,604	27,960	23,960	197,880

当連結会計年度 (2019年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
長期借入金	61,246	45,888	39,107	29,960	21,130	177,750
合計	61,246	45,888	39,107	29,960	21,130	177,750

(有価証券関係)

その他有価証券

前連結会計年度 (2018年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (千円)	取得原価 (千円)	差額 (千円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	投資信託	4,518	5,000	△481
合計		4,518	5,000	△481

当連結会計年度 (2019年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (千円)	取得原価 (千円)	差額 (千円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	投資信託	4,649	4,990	△340
合計		4,649	4,990	△340

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社は、総合設立型基金である全国情報サービス産業企業年金基金に加入していますが、当社の拠出に対応する年金資産の額を合理的に算定することができないため、確定拠出制度と同様に会計処理しております。

2. 複数事業主制度

確定拠出制度と同様に会計処理する、複数事業主制度の年金基金制度への要拠出額は、当連結会計年度 2,505 千円であります。

(1) 複数事業主制度の直近の積立状況

	当連結会計年度 (2019年3月31日)
年金資産の額	248,188,774千円
年金財政計算上の数理債務の額と最低責任準備金の額との合計額	203,695,726千円
差引額	44,493,048千円

(2018年3月31日現在)

(2) 複数事業主制度の掛金に占める当社グループの割合

当連結会計年度 0.03% (2018年3月31日現在)

(3) 補足説明

上記(1)の差引額の主な要因は、年金財政計算上の過去勤務債務残高(当連結会計年度△68,891千円)及び剰余金(当連結会計年度44,561,939千円)であります。

なお、上記(2)の割合は当社の実際の負担割合とは一致しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
税務上の繰越欠損金(注)2	1,403千円	4,407千円
賞与引当金	1,860千円	2,729千円
資産除去債務	1,376千円	1,871千円
その他有価証券評価差額金	132千円	99千円
その他	22千円	7千円
繰延税金資産小計	4,795千円	9,114千円
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額(注)2	—	△4,407千円
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	—	△1,871千円
評価性引当額小計(注)1	△2,245千円	△6,278千円
繰延税金資産合計	2,549千円	2,835千円
繰延税金負債		
資産除去債務に対応する除去費用	△534千円	△287千円
のれん	—	△517千円
繰延税金負債合計	△534千円	△805千円
繰延税金資産純額	2,015千円	2,030千円

(注) 1. 評価性引当額が 4,033 千円増加しております。この増加の主な理由は、連結子会社コンピュータマインドエナジー1株式会社において、税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額を 3,003 千円追加的に認識したことに伴うものであります。

2. 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

当連結会計年度（2019年3月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)	合計 (千円)
税務上の繰越欠損金 (a)	—	—	—	—	—	4,407	4,407
評価性引当額	—	—	—	—	—	△4,407	△4,407
繰延税金資産	—	—	—	—	—	—	—

(a) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	24.8%	—
(調整)		
住民税均等割	20.1%	—
税効果会計不適用連結子会社の損失計上による影響	55.8%	—
その他	△11.9%	—
税効果会計適用後の法人税等の負担率	88.9%	—

※当連結会計年度は税金等調整前当期純損失を計上しているため記載しておりません。

(企業結合等関係)

取得による企業結合

1. 企業結合の概要

(1) 相手企業の名称及び取得した事業の内容

相手企業の名称 システム情報開発株式会社

取得した事業の内容 新聞編集システム関連の開発を主要業務とするシステム開発事業

(2) 企業結合を行った主な理由

新聞編集システムの開発という領域において、業容拡大を実現できる数少ない機会だと判断し、当該領域で長年に渡る開発実績を有するシステム情報開発株式会社のシステム開発事業を譲り受けることといたしました。

(3) 企業結合日

2018年8月1日

(4) 企業結合の法的形式

現金を対価とする事業譲受

(5) 結合後企業の名称

変更ありません。

(6) 取得企業を決定するに至った主な根拠

当社が、現金を対価とする事業の譲受けを行ったためであります。

2. 連結財務諸表に含まれる取得した事業の業績の期間

2018年8月1日から2019年3月31日まで

3. 取得した事業の取得原価及び対価の種類ごとの内訳

取得の対価	現金	22,500千円
取得原価		22,500千円

4. 主要な取得関連費用の内容及び金額

アドバイザー費用 1,000千円

5. 発生したのれんの金額、発生原因、償却方法及び償却期間

(1) 発生したのれんのご金額

21,040 千円

(2) 発生原因

取得原価が受け入れた資産及び引き受けた負債に配分された純額を上回ったため、その超過額をのれんとして計上しております。

(3) 償却方法及び償却期間

8年にわたる均等償却

6. 企業結合日に受け入れた資産及び引き受けた負債の額並びにその主な内訳

受け入れた資産及び引き受けた負債の重要性が乏しいため、記載を省略しております。

7. 企業結合が連結会計期間の開始の日に完了したと仮定した場合の当連結会計期間の連結損益計算書に及ぼす影響の概算額及びその算定方法

影響の概算額については、合理的な算定が困難であるため記載しておりません。

(資産除去債務関係)

本社及び沖縄オフィス、荻窪オフィス、芝大門オフィスの不動産賃貸借契約に基づく退去時における原状回復義務を資産除去債務として認識しておりますが、当該債務の総額に重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

したがって、「IT関連事業」と「再生可能エネルギー活用事業」の2つを報告セグメントとしております。

各セグメントに属するサービスの内容は以下のとおりであります。

事業区分	属するサービスの内容
IT関連事業	システム開発事業、運用支援事業、日本語資源開発事業、その他事業（パソコン教室業務等）
再生可能エネルギー活用事業	再生可能エネルギー活用事業、防災関連商品販売事業、実証実験事業

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一であります。

報告セグメントの利益は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

(単位：千円)

	報告セグメント			調整額 (注) 1	連結財務諸表 計上額 (注) 2
	IT関連事業	再生可能エネルギー 活用事業	計		
売上高					
外部顧客への売上高	281,684	216,029	497,714	—	497,714
セグメント間の内部売上高 又は振替高	—	—	—	—	—
計	281,684	216,029	497,714	—	497,714
セグメント利益	57,795	7,617	65,413	△57,736	7,676
セグメント資産	55,788	404,647	460,435	241,752	702,188
その他の項目					
減価償却費	74	—	74	761	836

(注) 1. 調整額は、以下のとおりであります。

- (1) セグメント利益の調整額は、各報告セグメントに配分していない全社費用であります。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない一般管理費であります。
 - (2) セグメント資産の調整額は、報告セグメントに帰属しない当社グループでの現金及び預金並びに管理部門に係る資産であります。
 - (3) 減価償却費の調整額は、全社資産に係る減価償却費であります。
2. セグメント利益は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：千円）

	報告セグメント			調整額 (注) 1	連結 財務諸表 計上額 (注) 2
	I T関連事業	再生可能エネルギー 活用事業	計		
売上高					
外部顧客への売上高	339,968	103,247	443,215	—	443,215
セグメント間の内部売上高 又は振替高	—	—	—	—	—
計	339,968	103,247	443,215	—	443,215
セグメント利益又は損失 (△)	72,859	△14,008	58,851	△67,380	△8,528
セグメント資産	134,952	363,412	498,365	123,737	622,103
その他の項目					
減価償却費	1,387	35,994	37,381	28	37,410
のれんの償却額	1,753	—	1,753	—	1,753
有形固定資産及び無形固定資産の増加 額 (注) 3	21,140	13,888	35,029	—	35,029

(注) 1. 調整額は、以下のとおりであります。

- (1) セグメント利益又は損失 (△) の調整額は、各報告セグメントに配分していない全社費用であります。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない一般管理費であります。
 - (2) セグメント資産の調整額は、報告セグメントに帰属しない当社グループでの現金及び預金並びに管理部門に係る資産であります。
 - (3) 減価償却費の調整額は、全社資産に係る減価償却費であります。
2. セグメント利益又は損失 (△) は、連結損益計算書の営業損失と調整を行っております。
3. 有形固定資産及び無形固定資産の増加額には、のれんの計上額を含んでおります。

【関連情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

顧客の名称又は氏名	売上高（千円）	関連するセグメント名
㈱E-Light	182,032	再生可能エネルギー活用事業
NECソリューションイノベータ㈱	151,448	I T関連事業
日本電気㈱	58,919	I T関連事業

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

顧客の名称又は氏名	売上高（千円）	関連するセグメント名
NECソリューションイノベータ㈱	143,970	I T関連事業
日本電気㈱	111,843	I T関連事業
㈱E-Light	61,307	再生可能エネルギー活用事業

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：千円）

	I T関連事業	再生可能エネルギー活用事業	全社・消去	合計
当期償却額	1,753	—	—	1,753
当期末残高	19,287	—	—	19,287

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1. 関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

該当事項はありません。

(2) 連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主（個人の場合に限る）等

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (千円)	事業の内容 又は職業	議決権等の 所有 (被所有)割合 (%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (千円)	科目	期末残高 (千円)
役員	竹内次郎	—	—	当社 代表取締役 社長	(被所有) 直接 64.3	—	銀行借入に 対する債務 被保証 (注)	250,500	—	—

(注) 当社子会社は銀行借入に対して当社代表取締役社長 竹内次郎より債務保証を受けております。なお、保証料の支払は行っておりません。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (千円)	事業の内容 又は職業	議決権等の 所有 (被所有)割合 (%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (千円)	科目	期末残高 (千円)
役員	竹内次郎	—	—	当社 代表取締役 社長	(被所有) 直接 64.7	—	銀行借入に 対する債務 被保証 (注)	234,000	—	—

(注) 当社子会社は銀行借入に対して当社代表取締役社長 竹内次郎より債務保証を受けております。なお、保証料の支払は行っておりません。

2. 親会社又は重要な関連会社に関する注記

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

1株当たり純資産額は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
1株当たり純資産額	309円62銭	266円71銭

1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり当期純利益金額又は1株当たり 当期純損失金額(△)	0円74銭	△31円93銭
(算定上の基礎)		
親会社株主に帰属する当期純利益金額又は 親会社株主に帰属する当期純損失金額 (△)(千円)	336	△14,330
普通株主に帰属しない金額(千円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期 純利益金額又は親会社株主に帰属する当期 純損失金額(△)(千円)	336	△14,330
普通株式の期中平均株式数(株)	450,000	448,828

(注) 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

⑤【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期末首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
1年以内に返済予定の 長期借入金	52,644	61,246	1.03	—
長期借入金 (1年以内に返済予定 のものを除く)	323,866	313,835	1.36	2020年5月31日～ 2032年3月1日
合計	376,510	375,081	—	—

(注) 1. 平均利率については、期末借入金残高に対する加重平均利率を記載しております。

2. 長期借入金（1年以内に返済予定のものを除く）の連結決算日後5年間の返済予定額は以下の通りであります。

区分	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
長期借入金	45,888	39,107	29,960	21,130

【資産除去債務明細表】

区分	当期末首残高 (千円)	当期末増加額 (千円)	当期末減少額 (千円)	当期末残高 (千円)
不動産賃貸借契約に 伴う原状回復義務	5,546	885	—	6,431

(2)【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3)【その他】

該当事項はありません。

第7【外国為替相場の推移】

該当事項はありません。

第二部【特別情報】

第1【外部専門家の同意】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書

2019年6月28日

コンピュータマインド株式会社
取締役会 御中

監査法人やまぶき

指定社員 公認会計士 西岡 朋晃 ㊞
業務執行社員

指定社員 公認会計士 平野 泰久 ㊞
業務執行社員

当監査法人は、株式会社東京証券取引所の「特定上場有価証券に関する有価証券上場規程の特例」第128条第3項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているコンピュータマインド株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、コンピュータマインド株式会社及び連結子会社の2019年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

その他の事項

会社の2018年3月31日をもって終了した前連結会計年度の連結財務諸表は、前任監査人によって監査が実施されている。前任監査人は、当該連結財務諸表に対して2018年6月27日付けで無限定適正意見を表明している。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上